

コロナ禍二〇二〇年度の神奈川大学の教員と学生

― 一教員の対応と「日本文化史B」のレポートから

後田多 敦

はじめに

新型コロナウイルスの感染が世界各地へ拡大した二〇二〇年、日本社会の風景も大きく変わった。そして、二〇二一年九月の現在でも、日本では感染拡大が止まらない。大学もその中にある。神奈川大学の教員や学生は、このコロナ禍をどう過ごしているのか。本稿では二〇二〇年度の自身の大学業務、講義や調査研究の事例を話題としながら、コロナ禍の過ごし方などについて学生が書いたレポートも紹介する。パンデミック下神奈川大学の記録を残す試みである。

横浜専門学校（神奈川大学の前身）と戦後の神奈川大学でも教鞭をとった永田勝男という教員がいた。横浜専門学校で永田が担当した「日本文化史」の

一九四一年の「日本文化史講義案」と、それを受講した学生・鈴木静（高等商業科昭和十七年九月卒）のノートが大学に保管されている¹⁾。教員と学生の両方記録がそろっている点でも貴重だが、当該講義が行われた一九四一年は大日本帝国が米国・真珠湾などを奇襲し、対米英戦争が始まった年である。中国大陸での戦争が続くなかで、新しい戦争も始まった年ということになる。まさに戦時下の学園の記録だ。コロナ影響下で、キャンパス入構が禁止・制限され、講義がオンラインとなったとき、永田の講義案と学生のノートを思いだした。私も「日本文化史」を担当していたこともあり、永田に学び記録を残す必要があると考えた。

ここで紹介する学生の文章は、二〇二〇年度後期「日本文化史B」のまとめレポート、端的に言えば期末テ

スト答案に相当する。コロナ禍の自分の暮らしを振り返ってもらうことと、一方で学生の様子を知りたいということが意図だった。当然、公表は想定していなかった。成績提出後に『神奈川大学史紀要』第6号の「新型コロナウイルスと神奈川大学 二〇二〇年」を読み、学生側記録の重要さも再認識した。²⁾そこで、改めてレポート公開の可否を学生にメールで確認した。公開を許可してくれた学生は十八人、予想より多かった。「コロナ禍を伝えるのに役立つなら使ってください」と、コメントのついた返事も返ってきた。

学生レポートだけでは不公平なので、自分の一年間も紹介したい。ただ、学内の役割にあつたわけではないので、あくまで一教員としての動きだ。また、コロナ禍での私の対処が適切だったのか、教員として一般的だったのかはわからない。しかし、事例の一つであることは確かだろう。「日本文化史」を結節点として、担当の一教員と受講学生のレポートの両方からコロナ禍の大学の様子を伝えたい。

コロナ禍の新学部新学科スタート

神奈川大学では、二〇二〇年四月から新学部・国際

日本学部（国際文化交流学科、日本文化学科、歴史民俗学科の三学科）が開設され、翌二一年度には新キャンパスも動き出す予定だった。その時期のコロナ感染拡大である。影響は二〇二〇年一月から、私の周辺でも始まった。三月に計画していたグループ調査は中止した。私の参加した学内会議は、年度末の三月十九日を最後に後はオンラインとなった。そして、二〇一九年度卒業式が中止となった。



写真1 筆者研究室があつた横浜キャンパス17号館の入口ドアに貼り出されていた「入構禁止」のお知らせ

2020年4月21日筆者撮影

新年度四月一日から予定されていた学科会議や学生歓迎会、ガイダンスなど、対面の会議や催しなどは全て中止となった。三日に予定されていた二〇二〇年度入学式も中止だった。⁽³⁾緊急事態宣言が出された四月七日、属する歴史民俗学科では、新任教員も含めてメールで連絡を取りあいネット上で集まった。そして、使用ソフトの確認など基本的なところから始まった。その後、大学がZoomを標準とするとの情報が伝わり、十日には事務職員も加わってZoomで動き出した。学科は新設だが、ほぼ同じ教員で大学院歴史民俗資料学研究科が運営されていたので、学科も大学院の日程や活動と並走し動きだした。学内の各種委員会も、Zoomで少しずつ活動が始まった。

私が参加した年度初めの主な打ち合わせや会議などを手帳から抜き出したのが、表1「コロナ年度スタート時期の主な会議など」だ。会議の具体的な内容はメモされていないが、大学提供ソフトのIDや機器など、互いのネット環境の確認などを行っている。私は以前から遠隔の会議や講座でSkypeを使っていたので、マイクやカメラなどは一通り揃っていた。ただ、大学のWebのクラス管理システムとZoomはほとんど

表1 「コロナ年度スタート時期の主な会議など」

月日	事項（主なZoom実験・会議）
4月	7 緊急事態宣言発出／学科教員打ち合わせ（ネット）
	10 歴史民俗学科教員・職員でZoom実験
	12 大学院歴史民俗資料学研究科の院生とZoom実験
	13 学科教員ほかとZoom実験
	15 大学院歴史民俗資料学研究科会議（Zoom）
	16 学科新入生とZoom実験
	17 外国語学部ゼミ生とZoom実験
	18 学科新入生とZoom
	19 大学院業務関連委員会のZoom実験
	20 大学院業務関連委員会のZoom実験
	22 非文字資料研究センター運営委員会
	23 学科新入生とZoom
	28 歴史民俗学科ガイダンス（Zoom）
	30 大学院業務関連委員会会議（Zoom）
5月	1 大学院業務関連委員会会議（Zoom）
	4 学科内Zoom実験講義（角南聡一郎先生）
	11 2020年度前期講義スタート
	13 歴史民俗学科会議、国際日本学部教授会（Zoom）
	16 大学院歴史民俗資料学研究科中間報告会（Zoom）
	17 大学院歴史民俗資料学研究科中間報告会（Zoom）

使っていないかった。そのため、ソフトやシステムの操作方法を確認するところから始めた。

学科新入生との関係では、最初のハードルは告知や接点だった。例年なら新入生はキャンパスに行くことから、大学生活が始まっていく。ところが、そのキャンパスは入構が禁止・制限されて利用できない。大学生活をどこから始めればいいのか。教員の方も、教員同士でも事務方とも直接会って打ち合わせをすることもできない。私は新入生ガイダンス担当で、学科一年生の必修科目の担当だったこともあり、事務と連携し学科新入生全員へメールを送りコンタクトを試みた。いわば「ネット・デジタルキャンパス」の入り口を知らせ、案内することが、学生への最初の対応となった。

ファーストコンタクト

新学科二〇二〇年度の新入生は定員びつたりの七十人だった。キャンパスへの入構が禁止・制限されているので、大学は学生に入学関連書類を送付していたようだ。ただ、コロナ禍で例年と異なる移動などもあり、その時期に送付先に学生がいないこともあった。大学から交付された学籍番号やネット上のID、メールアドレス

カウントなどは、学生がそれを受け取っていないれば使えない。例年なら三月末から四月上旬のキャンパスでやり取りされていたことが、その場を失って、難しい作業となっていた。事務方も入試センターの合格者情報も含めて、例年とは異なるハードな仕事になっていったようだ。

そこで、私の方では学部担当事務と連携し学科新入生七十人の大学メールアドレス宛に一斉メールを出した。その大学提供メールアドレスの利用を学生が始めているかは不明だ。それでも、大学HPへのアクセスの呼びかけや通信環境のアンケートを兼ねて接触を始めた。一回目は四月十四日で、簡単な挨拶メールを発信した。以降、何通かを発信している。何度目かには学生の通信環境調査アンケートを送った。学科の丸山泰明先生は十六日までに Slack に学科のワークスペースを開設していた。二十四日までに学生の三十二人が参加したという。私が送信した通信環境アンケートは以下だ。

国際日本学部歴史民俗学科新入生の通信環境調査
【2020.4.15】

以下の質問に答えて、このメールに返信ください。
このメールの確認が遅れても、かまいません。オンライン授業のための調査です。確認した段階で、かならず返信ください。

返信先…〔後田多メールアドレス〕

- 1) 氏名
- 2) 学籍番号
- 3) インターネットに接続するパソコンを所持していますか。
- 4) そのほか通信機器を持っていますか（具体的に書く。例えば、スマートフォン）
- 5) 自室はインターネットに接続できますか。
- 6) プリンターをもっていますか。
- 7) インターネットを使って、動画などを閲覧したことはありませんか。
- 8) 日常的に使っているメールアドレスを教えてください。
- 9) 携帯電話など、連絡がとれる連絡先を教えてください。

アンケートの回答が入り始め、十五日は六人、十六

日は十一人、十七日は二人、十八日三人、そして、二十八日までには四十八人から回答メールが届いた。返信があったということは大学メールの利用を始めており、大学WEBの各種サービスも利用可能な状態ということになる。予想していたことだが、早めに返信が返ってきた学生の環境は、比較的充実していた。回答を見て、直接コンタクトができれば課題は少ないことを実感した。暮らしの場所自体が「緊急避難的」な学生も一定数いたことも、連絡するなかでわかってきた。

回答のない学生も含めて四月二十三日までに新入生五十四人とコンタクトがとれた。そして、同日に学部新学科と大学院の新入生を対象としたプレ懇談会（Zoomの操作練習も兼ねて）を開催した。翌二十四日には正式な新入生歓迎会をZoomで開催している。手元の記録を見ると、二十四日の歓迎会に参加した学生は六十五人とある。私に返信のない学生でも、丸山先生のSlack、大学HPや学生同士の情報によって参加した学生もいた。未参加学生には再度呼びかけ二十五日、二十六日とZoom実験を行った。それでも、二十七日段階でも直接接触できない学生が二人



写真2 Zoomで講義ができるよう暫定的に部屋の配置を変え、手元にあるもので一応の環境を整えた
自宅、2020年4月26日筆者撮影

残った。大学院の方は、五月二日に新入生懇談会を開催し、その日に全員が参加してくれた。
オンライン講義の準備と始まり

新入生への対応と並行しながら、二年生以降とのコ
ンタクトや自分のオンライン講義の準備を始めた。新
学部への移行期で、前年度まで属していた外国語学部
国際文化交流学科科目も継続し担当することになって

いた。そのため国際日本学部、共通教養と大学院のほ
か外国語学部の科目も担当していた。大学院の私のゼ
ミには二〇二〇年度前期の修士論文提出予定者一人と、
博士論文を秋に提出する予定の者一人がいて、二人の
対応は喫緊だった。

大学が講義用Zoomアカウントを四月下旬から配
布する予定となっていたが、まずは自前のZoomア
カウントで四月十二日から大学院生（前期課程と後期
課程）らと接続実験を始めた。新入生の一部と十六日、
外国語学部ゼミ生（七人）とは十七日にZoom接続
実験を行った。Zoomを立ち上げ待っている、院
生も学部生も、予定時間集まってきた。学生からす
ると、教員の対応力の方が心配だったのかもしれない。
大学院歴史民俗資料学研究所の第一回会議は四月
十五日、Zoomで開催された。新年度、私が参加し
た最初の公式会議だ。そして、四月下旬からの会議は、
そのままZoomとなった。あつという間にZoom
会議が当たり前になっていた。新学科学生との公式日
程は新入生歓迎会（四月二十四日）からだ。その間、
横浜キャンパスの研究室へ何度か行き、講義関連資料
を自宅へ持ち帰り、自宅で講義を発信できる環境を整

えた。

歴史民俗学科では五月四日に角南聡一郎先生がZoomを使ったデモ講義を行い、ノウハウを共有した。大学院ゼミでは五月六日、修士論文の前期提出予定院生にZoomで報告をやってもらった。まだ、前期授業は開始していなかったが、控えている中間報告会の準備だった。それと、その院生は中国に滞在していたので、中国の通信事情でのZoom利用を確認する目的もあった。院生はITに詳しくVPNでネットに接続し、論文の準備も順調だった。聞いていたほかの院生も、どこかコロナ禍の不安を解消できたようで、報告を聞き議論している間にふと安堵感が広がったように感じた。

二〇二〇年度前期のZoom講義が五月十一日から始まった。私は担当科目総てを、オンタイム(ライブ)で行うことにした。受講生が最も多いクラスは凡そ三百人(共通教養の「日本史」、少ないクラスは二人(大学院科目)。時間割通りの日程でZoomカメラの前に立ち、パワーポイントや資料を共有しながら講義した。一回目から学生は特に問題もなくZoomに入り、チャットに名前を書き込んできた。TAがネット

やデジタルに詳しい院生だったことは幸運だった。TAも遠隔だがZoomのサポートもやってくれた。

前期講義の難関は、四人の教員で担当するオムニバス講義「生と死を考えるⅡ―日本近現代史を素材に」(共通教養)だった。Zoomでオンタイムだが、私以外は非常勤(今井昭彦、内海孝、齊藤研也)で、ネットの環境やスキルが違っていた。実験でZoomをつなぐと、今井先生は自宅から顔を出してくれた。内海先生は自宅でZoomができない。齊藤先生はITを使いこなし、大学に出勤していたので、内海先生への協力をお願ひした。一回目(五月十四日)は全員揃ってZoomで顔を出しスタートできた。当初の不安とは逆に、順調だった。

大学院歴史民俗資料科学研究科では、例年年度中に二年度、院生の中間報告会を行っており、二〇二〇年度前期課程一回目の報告会が五月十六日と十七日に予定されていた。コロナ年度でも、論文提出スケジュールに変更はないので、Zoomで予定通りの日程で実施した。中国にいる数名の院生は現地から報告していた。二日間で二十六人。まるまる二日間、へとへとになりながらモニターに向かった。院生はZoomにうまく



写真3 研究室引っ越しのための梱包作業。コロナ禍でも淡々と進めていた。開いたドアの部屋が私の使っていた場所

横浜キャンパス17号館4階、2021年2月1日筆者撮影

対応し、海外や遠隔地から参加できるというメリットの方を実感できた。

Zoomに慣れてくると、利点にも気がついた。一番の恩恵は大学院の演習だ。社会人や在中国の院生もいたので、全員に比較的公平な環境となった。しかも、パソコン画面で資料も拡大して見ることができた。この利点を生かし、明治十二年に書かれた土屋寛信医師の資料を読んだ。置県直後の沖繩にコレラ対策で派遣された際の記録だ。効率よく予想以上のペースで進み、「Zoomは便利」という気になった。勢いづきそのまま夏休みも自由参加で週一回のペースで続け、後期終了までには読み終えた。翻刻に解説をつけ『人文研究』へ投稿した。コロナ禍でZoomだったからこそ得られた成果だろう。^④

資料や課題など、学生とのやりとりはTeams(大が提供。標準)を利用したが、システム上一クラスの登録上限が二百人だった。操作でクリアできたようだが、私はノウハウがないままスタートせざるをえなかった。そして、二百人を超える科目は課題をメールで個別に受け取ったため、メールが溢れかえった。レポートをデータで受け取る経験とノウハウがなかっ

たので混乱し、結局、プリントして従来通り紙で管理した。

前期六月末までの講義などは、自宅からZoomで行った。その後、対面会議も入りだしたため、七月下旬からは大学の研究室（六角橋）へ拠点を移した。そして、Zoomのオンタイム授業、Teamsを使ったクラス管理の方法は、後期も継承した。前期の経験があるので、後期は大丈夫だろうと考えていた。ところが、意外な科目で手間取った。国際文化交流学科二年生必修科目で、五クラスに分け五人の教員（深澤徹、上原雅文、駒走昭二、柳赫秀、後田多敦）が担当する「国際文化交流専門演習ⅠB」だ。教員が一度は他クラスを一回ずつ巡回する方式だ。例年は対面なので、巡回はクラス教室へ行けばよかったが、巡回や情報共有の仕方で手間がかかった。ただ、担当は専任教員だったので、各自の方法で上手く対応していた。

二〇二〇年度を振り返ってみると、技術的なことに終始していたのがわかる。他教員と情報交換もしたが、スキル不足で根本的な軌道修正はできなかった。オンタイムを基本方針とし、あとは個別に対応したが、このスタイルで結果的に良かったと思う。ネット経由で

はあっても、学生と直接会話ができ、学生の試行錯誤も感じることができたからだ。年度中、対面で直接話せた学生は、後期に開催されたキャンパス体験イベントのほかはTAなど数人だった。二〇二〇年度は大学院生の論文の口述試験まで、Zoomによる遠隔だった。そして、二〇二〇年度卒業式は、規模を縮小しながら実施された。

もう一つ、年が明けた年度末には研究室の新キャンパス（横浜・みなとみらい）引っ越しが待っていた。私の研究室の梱包作業は二月一日で、新しいみなとみらいキャンパスの研究室に入れたのは三月八日。梱包は業者に任せ、開梱は三月八日から自分で行った。資料は一か月余、梱包管理されたまま利用できなかった。新しい研究室が利用できるようになった二〇二二年三月八日以後は、みなとみらいを拠点とし横浜キャンパスへは時々足を運んだ。二〇二一年度からの二拠点キャンパス生活の始まりでもあった。

研究や社会活動など

コロナ感染拡大下では、研究や調査、社会活動でも模索が続いた。まとまった時間をつくれる春休みや夏

休み期間中は、例年調査などにあてていた。二〇二〇年三月も幾つか予定していた。一つは三月に予定していた非文字資料研究センター研究班の七、八人による沖縄・宮古島での調査だ。地元研究者も合流する貴重な機会だった。しかし、飛行機での移動、現地では自動車での集団行動だったので中止した。それ以外、近隣の単独調査は実施した。沖縄・石垣島の自衛隊基地建設地調査は飛行機を利用するので悩んだが、配備計画は進んでいるので思い切って実施した。

二〇二〇年新年度が始まった後、緊急事態宣言発出以降の調査や研究会などは一度基本的にキャンセルした。表2「主な調査や社会活動」は、私自身の二〇二〇年三月から翌二一年三月までの主な調査や企画である。四月から五月中旬までは、最低限の対応しかできていなかった。大学院の中間報告会が無事に終わったあたりで、ひと息付けるようになったと思う。六月末から講義や学内会議以外でもZoomでの作業も少しずつできるようになった。

沖縄県立博物館・美術館から「博物館文化講座」(六月二十日予定)の講師の声がかかっていた。県境をまたぐ移動自粛要請が出てはいたが、予定日六月二十日

までには解除されそうだった。実施か中止か。博物館自体は開館していた。館側は私に判断を委ねたのでZoomも提案してみたが、環境が難しいということで最終的には中止した。移動自粛は開催日予定の前日六月十九日に解除され、感染者も減少傾向だった。社会的制約や感染の傾向を踏まえて、判断することの難しさを実感した。

表2 「主な調査や社会活動」

		月	
		事項	
3	国立劇場おきなわで新作組踊「塩尻」観劇	水戸での資料調査(二人・茨城県)	実施
12	講演・お城EXPO 2021(神奈川県 対面)	立川での資料撮影(一人・東京都)	実施
11	首里城復興研究会シンポ(沖縄県 (対面+Zoom))	宮古島での神社・祭祀空間調査(集団・沖縄県)	中止
10	講演・琉球民族独立総合研究会(沖縄県 (Zoom))	石垣島自衛隊工事地調査(一人・沖縄県)	実施
9	企画研究会《首里城と第32軍司令部壕》(Zoom)	沖縄県立博物館・美術館の文化講座(沖縄県)	中止
7	首里城正殿火災後の調査(一人・沖縄県)	企画研究会《文化創生》を考える(Zoom)	実施
6	神大の沖縄での入試懇談会・講師(沖縄県)	企画研究会《文化創生》を考える(Zoom)	実施
5	首里城正殿火災後の調査(一人・沖縄県)	首里城正殿火災後の調査(一人・沖縄県)	中止
4	首里城正殿火災後の調査	首里城正殿火災後の調査	実施
3	企画研究会《首里城と第32軍司令部壕》(Zoom)	首里城正殿火災後の調査	実施

コロナ年度で最初に企画したのは、七月二十七日に実施した「文化創生」を考える―研究と現場から―というZOOM学内研究会。一般公開の研究会だったが、それ以前に内輪の研究会は非文字資料研究センター研究会などで開いていた。悩ましいのは調査活動だ。社会的制約だけでなく、飛行機や新幹線など乗り物での感染不安もあった。しかし、沖繩の首里城正殿などが二〇一九年秋に焼失したこともあり、火災後の動向も気になっていた。同一九年十一月と十二月に首里城を訪ねてはいたが、復旧状況の確認も必須だった。移動が許されるタイミングを見計らって、二〇二〇年六から七月、そして九月中旬に二度、修復状況などの確認など、短期間で行った。ただ、それは例外だった。基本的な活動以外は自宅に籠り資料整理などを行った。オンラインや「行動自粛」もマイナスばかりではなかった。大学院演習で利用した土屋寛信資料は、本来なら借用に行くべきところを所蔵している子孫がコロナ禍だからと丁寧に送ってくれた。また、自由に使える時間が増え、それを利用して資料を整理するなかで新事実を確認することができた。その一つが、関心事でもあった首里城正殿石階段両側の大龍柱の向き問題

だ。一九九二年の正殿復元の際、大龍柱は相対向き（互いに向き合う形）で設置されたが、本来の向きは正面向きだとする主張が根強くあった。そして、正殿が二〇一九年の火災で焼失したこともあり、その向き論争が再燃していた。

家籠りで、琉球国末期の大龍柱が正面向きだったことを確定する資料に出会ったのである。そして、沖繩の市民グループが主催する講演会や、琉球民族独立総合研究学会での講演会（十一月十四日）、国の「首里城復元に向けた技術検討委員会」委員も参加する「首里城再興に関する公開討論会」（十一月二十二日、主催・首里城再興研究会）などに声がかかった。現地沖繩の会場やパネリストは対面だが、私はいずれもZOOMで参加した。その時期は、学内業務などがあり沖繩に行くことは難しかった。つまり、ZOOMでなければ参加できなかったのである。オンラインのノウハウが定着していたことが幸いした事例だ。

「お城EXPO 2020」（十二月二十日、主催・お城EXPO実行委員会）から、セミナー講師の声がかかっていた。対面企画なので迷ったが、新キャンパスのある横浜・みなとみらいでの開催ということもあ

り、また後期講義日程も終了する時期だったので引き受けた。ところが予定日が近づくとも感染が再び拡大し、「お城EXPO 2020」自体の開催が微妙となった。結果的に企画は開催され、セミナーは人数を制限して対面で実施された。企画者側の気苦労も実感させられる機会となった。

調査活動や催しなどは、その時、その場所でしかできないことが少なくない。そして、その時に行わないと二度と機会が巡ってこないものもある。制約を具体的に感知できるなら、「する、しない」「できる、できない」の線引きは比較的しやすいかもしれない。しかし、コロナの感染リスクは具体的にはなかなか感知できない。調査や企画は、何をどこまでやるのか。あるいはやれるのか。やらないといけないのか。社会的制約のほか自分自身のリスク認識なども問われていた。

「日本文化史B」学生レポート

「日本文化史B」（後期）は外国語学部国際文化交流学科の専攻科目で、新学部には引き継がれず二〇二二年度で終了となる。そのため、外国語学部二年生から四年生までが対象だ。日本の歴史や民俗に関心を持つ

学生が多い新学科とは違って、こちらの学生は異文化や国際交流などへの志向が強い。ただ、一方で高学年生や海外への留学を経験した者は自文化への関心も持ち始めるようになる。そして、一度、異文化という他者への関心をくぐっているのが、自己相対化などの必要性も感じているというのが、この学科学生の強みだ。二〇二〇年度の登録者は四十八人だった。私が講義で扱う時代は近代から現代、コロナ禍で十二回だったので内容を調整し、以下とした。

授業の目的と目標（授業のガイダンス）

近代日本の選択（脱亜と入欧）

近代日本のシステム1

（天皇制や「言葉」をめぐる問題）

近代日本のシステム2（新聞・博物館の登場）

近代日本のシステム3

（夏目漱石「私の個人主義」から）

文化とマイノリティー

（詩人・山之口獯の人生から）

戦争と文化（文化人たちの戦争）

戦前と戦後の連続と断絶

戦争体験と戦後

二つの戦後（高度成長と消費文化、沖縄の戦後）

昭和から平成へ

文化の現在・まとめ

講義は、各回のテーマに沿った形でそれぞれの時期の課題と歴史的背景を説明し、関連する文章や資料を読ませ、動画などを見せた後、簡単な要約と感想を書いてもらうスタイル。例えば、福沢諭吉、夏目漱石や高村光太郎、金子光晴のエッセーや作品などを使い、山之口獠や海上自衛隊、野坂昭如に関する映像なども見せたりした。そして、それらの人々が時代をどう受け止め、どのような課題と向き合いながら仕事をしたのかを考えてもらった。その上で、まとめや感想を各回の課題とした。

最終レポートは期末テストの代わりだ。提出者は四十二人。うち、十八人が掲載を許可（名前まで了解してくれた学生は八人）してくれた。レポートを読んでみると、コロナ禍の受け止め方や対処の仕方は、学生それぞれだ。勉強への取り組み方や家族との関係が、コロナ禍を機に変わったという学生もいた。また、海

外の大学への留学を準備したり、既に決まっていたりした学生にとって、コロナはその機会を奪うものにもなった。人生設計の見直しも迫られていた。オンライン講義に対しては、否定的な見方が必ずしも多数ではなかった。新しいツールとしての意義を感じている学生も一定数いた。その辺りの受け止め方や対処の違いの背後に何があるのか、興味深い点だ。

長い歴史のなかで考えれば、直面しているコロナ禍での課題は、特別なことではないのかもしれない。永田勝男の講義を一九四一年に受講した横浜専門学校（現横浜国立大学）の学生は、動員や繰り上げ卒業をさせられたりした。戦場へ送られた学生、戦争の犠牲となった学生もいただろう。万全な環境で生きることができる人は、多くはない。一人ひとりが与えられた時間のなかで生きる暮らしと、模索や格闘などが「文化」であり、その蓄積されたものが「文化史」となる。このように考えて、学生レポートを読むと、そこには時代状況を自覚し模索し格闘する姿があった。コロナ時代を生きながら、社会や時代、自分を客観的に見ようとする彼らの努力も伝わってくる。

おわりに

キャンパス入構の禁止や制限、オンラインでの授業や会議など、想像していなかったことがコロナ禍で一気に押し寄せた。コロナにキャンパスや街を占拠されていた。そのなかで他の教員や学科、学部などはどう行動していたのか。他者が見えづらい、ということは「オンライン・デジタル」での特徴のようだ。二〇二〇年四月から五月ごろのメールを見直すと、私が置かれていた小さな範囲でも、いろいろな部署や委員会、担当者からのメールが数多く行き交っている。タイトルを見ただけでは、記憶に全く残っていないものもあった。

コロナ禍でできなかったこと、逆にコロナ禍でもできたはずのことは何か。そして、困難でもやる必要があったことは何か。「大学」を大学たらしめるもの、大学に不可欠なものは何か。コロナ禍でのさまざまな制限は、研究の本質や大学の在り方を見直す機会でもあった。この機会に考えるべきことは多かつただろう。しかし、私の二〇二〇年度は、その答えを探すというよりも、状況に追いかけられ、しなければいけないこ

とに対処することで精一杯だったようだ。

二〇二〇年に着任した同僚教員が、もらした言葉が記憶に残っている。「スタート地点にさえ立てていない気がした。ネットにつながらなければゼロ。自分は大学に採用されたという実感さえなかなか持ててない」と。そして、若い新学部新入生はなおさらだろうとも言っていた。コロナ以前の教員や学生には、大学での生身の体験や記憶がある。新入生や新任教員には、キャンパスでのその体験や記憶はない。ネットとの関係が「大学」であり、「キャンパス」だった。その違いが持つ意味をどこまで受け止めることができていたか。自信がない。

「オンライン・デジタル大学」では、情報共有や対話や議論がより必要で重要だったように感じている。その点、学生と直接対話する数少ない機会となった外国語学部ゼミは有益だった。学生に自分が気になったニュースをその背景なども調べてもらった上で持ち寄ってもらい、それをネタに議論した。受講生は七人、アルバイトを継続できている学生、郷里に戻った学生、家族と同居で行動を自粛している学生など、環境は多様だった。学生はそれぞれの環境で自覚的にコロナと

向き合い、工夫しながら勉強していた。コロナ禍の影響や経験を抱えて、今後長く生きることになる学生が、事態を深く深刻に受け止めていることが伝わってきた。

註

- (1) 後田多敦「神奈川大学資料編纂室蔵〈永田勝男『日本文化史講義案』〉」『神奈川大学史紀要』第4号（神奈川大学、二〇一九年）八九―一三五頁
- (2) 大坪潤子・齊藤研也編「年表・新型コロナウイルスをめぐる神奈川大学の二〇二〇年」、齊藤研也「『学生の声』収集の試み―神奈川大学における新型コロナウイルス―」『神奈川大学史紀要』第6号（神奈川大学、二〇二一年）三―三六頁、後田多敦「『国家溶解』の後にのこるもの―医療を重視しない社会の行方―」『神奈川大学評論』第96号（二〇二〇年）一三三―一三三頁、同前「コロナ禍の『日常』と待ち構える『新世界』」『神奈川大学評論』第98号（神奈川大学広報委員会、二〇二一年）一四三―一五〇頁参照
- (3) のち二〇二一年三月三十一日に開催
- (4) 後田多敦「土屋寛信『琉球紀行』全―沖縄県設置直後のコレラ感染と政治の記録―」『人文研究』第203集（神奈川大学人文学会、二〇二一年）六七―一三二頁

【資料】二〇二〇年度「日本文化史B」受講生レポート
(一部)

凡例

- 一 紹介する資料は、外国語学部国際文化交流学科の二〇二〇年度後期科目「日本文化史B」(オンタムムライブ)受講生のレポート四十二点のうち、掲載が許可された十八点。
- 一 氏名の代わりに掲載順にアルファベットを付した。名前を公開できる場合はかっこで氏名を示した。
- 一 レポートの体裁は横書きだが、縦書きに直した。文章は表記も含めて原文のまま。一部改行を加えたほかは、タイトルや小見出しなどがあるものもないものがあるが、原文通りとした。明らかな入力ミスは修正し、そのままものはかっこで編注を入れ修正した。



【問】新型コロナウイルスの感染が広がり、私たちの暮らしや社会が大きく変わった中で、あなたはどのように過ごしていますか。そして、新型コロナウイルスの問題を日本文化史のなかでどのように位置付けます

か。自分の体験を踏まえて、できるだけ具体的に書いてください。



◎氏名..A

新型コロナウイルスがまだそこまで拡大していない時期から、徐々に私が働いていたアルバイト先にも影響が出始めた。私は新宿のある大きな映画館でアルバイトをしていたのだが、そのぐらいの時期からまず、勤務時のマスクの着用と消毒の徹底が義務づけられるようになった。しかしその時点では少し清掃のやり方が変わったぐらいであり苦労はしていなかった。

少し月日が経ち、毎日のように新型コロナウイルスのニュースばかりがテレビやネットで流れるよう(に)なると、映画館の短縮営業や上映が延期になる作品が出てきた。そのため私自身もシフトに入れる時間が格段に減り、とうとう一ヶ月間丸々入れなくなってしまう。そしてその頃から、オンライン授業も徐々に始まっていった。

私はこのアルバイトが初めてのバイト先であったこともあり、辞めるか辞めないかでとても悩んだが、結局その後もしばらくはシフトには入れないと言われ退

職することにした。

オンライン授業にもなかなか慣れることが出来ず、私はパソコンを普段からあまり使用していなかったのでもパソコンを打つというところから苦労したのを今でも覚えている。

オンライン授業にだいたい慣れてから、私は元々学校に行くだけで一時間ちよつとかかっていた分朝がともも楽になり、また満員電車に乗る必要もなくなったのでストレスが減った。曜日によっては顔を見せなくて授業を受けることが出来る曜日もあったので支度する時間も減りとても過ごしやすかった。しかしながら、アルバイトは探してはいるものの、私のように退職した人が世間でも多くいたのでなかなか決まらないうままだった。

この自粛期間中に私は韓国ドラマにはまった。というよりも韓国にはまった。きっかけはある韓国のプロデューサーが何万人もの日本人の応募者の中で、次世代のアイドルグループを作るというオーディション番組をたまたまテレビで見たことだった。そのオーディションで有名な韓国アイドルの曲が使われ、それを聴いて私も韓国の曲を聴くようになった。そしてそ

こから韓国ドラマを見始めて一気にはまっていった。

韓国ドラマや曲を聴いていると私は韓国語を勉強したくなり、独学で韓国語の勉強を始めた。基本的に勉強はあまり好きな方ではないが、韓国語が分かってくると韓国ドラマや曲の意味が日本語字幕を見ずに分かるのでそれが嬉しくて楽しく続けることが出来た。こうして私の夏休みは韓国ドラマと語学の勉強で終わった。

夏休みが終わり、授業で夏休み何をしていたかというのを英語で友達と話すという時間があつた。驚いたことに、多くの女子の友達が私のように韓国にはまっていた。その中には私と同じきっかけの人が何人もいた。先程挙げたオーディション番組は特に新型コロナウイルスがあつたから放送したというわけでもなく、たまたま放送した時期がこの時期と被つたのである。そしてその番組はコロナウイルスで外に出ることの出来ない状況だったということもあり、多くの人が視聴しそこで決まったグループも今でも多くの人から注目されている。新型コロナウイルスによって仕事を失ったり、鬱になってしまつたり、実際に感染し死亡してしまつた人がいる一方で、この状況下が味方をして人気を獲得したり、この状況下だからこそ売り上げが伸

びた会社（Zoomを作った会社など）もあるという実態を見て私は、この新型コロナウイルスの拡大が誰かの不幸の源になっている一方で誰かの幸福の源になっているのだと感じた。

新型コロナウイルスによって私たちの生活スタイルががらりと変わり、そしてその生活スタイルが今や定着しつつある。私はこの社会の変化を日本文化史から考えると、第二次世界大戦のようなものだと思います。そこまで大きな出来事なのかと思われるかも知れないが、そのように考えた理由を以下で大きく分けて三つ挙げる。

一つ目は新型コロナウイルスの影響が日本だけでなく世界にも影響しているということである。今までの自然災害や病気の流行は日本や広まったとしても近隣諸国のみであった。それに比べて、今回の新型コロナウイルスはニュースの内容を見ても日本だけでなく世界でどの位感染者数があるか、世界ではどのような感染対策が取られているのかなど、日本のニュースの中でも日本だけでなく世界にも焦点を当てている。

二つ目は新型コロナウイルスの影響により、生活スタイルが大きく変わったことである。戦争は今までの

生活を180度変えるぐらいの影響力を持つ。そして第二次世界大戦後、日本はマッカーサーによって新たな政策がなされた。そして今回もこの状況と上手く付き合っていくためにはどうすればいいのか、買い物の方が変わっていくなど、新たな政策が多く生まれた。最後に三つ目の理由だが、それはこの状況下が長く

続く可能性があるという点である。第二次世界大戦後も金子光晴の『絶望の精神史』に見られるようにすぐに元の生活に戻ったわけではなく、戦争によって多くものを失った日本人の変貌が書かれていた。今回の新型コロナウイルスもそのウイルスがいつ収まるかも分からなければ、収まった後もしばらく今のような生活スタイルが続くように私は思う。現に一度収まった時期でも、少し緩和はされたものの今までの生活スタイルや私たち自身の考え方は大きく変わったように思う。

以上の理由から私は新型コロナウイルスを第二次世界大戦のような立ち位置にはないかと考える。そして近日、再び新型コロナウイルスが広まってきていることから、私たちはこれからもこの新型コロナウイルスとの上手な付き合い方を考えていかなければ

ならないと思う。

◎氏名：B（伊井空）

昨年の末ごろから新型コロナウイルスが世界中のあらゆる場所で大きく感染が拡大している。私達の平穩は瞬く間に破壊され、もはや今現在の日本の世の中では「普通」という言葉の定義さえもが少しずつ変わり始めていることも多くの人々が感じていることだと私は思う。今回はこのような状況下の中で、私が日本という国の文化や国としての在り方に対していくつか疑問を持ったため、それについて今回は記述をしていきたいと思う。

まず初めに、メディアという媒体についてである。今現在のメディアはテレビ、雑誌、インターネットと様々な物で私達はメディアを通して情報を日々手に入れている。ニュースの言っていることはすべて正しいと疑わず、すべてのニュースや情報を鵜呑みにしている人も日本には少なくないと思う。メディアの大きな落とし穴にはまっついているとも知らずに。まずメディアの大前提というものは、ニュースを届けることでは無く、いかに国民に注目をしてもらい、どれだけ閲覧数を

稼げるかということであると思う。ニュースを運営している企業は利益を挙げるために仕事をしている。そう考えると、真実をありのままに伝えるよりも、情報に注目してくれるような見出しや内容で、注意を集めたほうが閲覧数は稼げる。今回のこのコロナウイルスの情報も、全ては嘘というわけではないが、明らかに情報を操作しているなどという記事やニュースも見受けられた。例えば、コロナが流行し始めた二月に竹下通りの現在の状況というニュースが放送されていた。人がたくさんいて密になっているというニュースだったが、実際のその当時の竹下通りは人はまばらで、昔の写真が使われていると私は後で知った。なぜ国民の不安をおおるような報道をし、真実を伝えないのか私は不思議でならなかった。

次に、田舎での話である。私の隣の町でコロナに感染してしまった四十代の会社員の方がいた。彼は都心に毎日通勤をしており、コロナにかかってしまってもこのご時世仕方がないと私は思った。しかし、近隣住民の人々は疫病神だとか、病原体だと彼を呼び、彼の家に嫌がらせをする人が多かったそうだ。その影響は彼だけでおさまらず、彼の家族にも及んでしまった。

その結果ローンの残っている家を手放し引っ越しを余儀なくされたそう。まるで戦時中の非国民に対する差別のようだと感じた。日本のこの二千年以上の歴史の中でも、人と違うことを考える人や、人と違うものを手にしてしまった人を大勢で袋叩きにするという風習は古くから日本に根付いている。礼儀の国と他国から絶大な信頼を受けている日本だが、本当にそのような人々の集まりが日本という国なのか私は疑問に思った。固定観念に縛られ続け、自分が信じる物はすべて正しいと考える大人やそれの子供にも残していく親も多い。永遠と繰り返されるこの負の連鎖はいつ断ち切られるのだろうか。このコロナという一つの大きな局面に直面している今だからこそ、本当の人間性が浮き彫りになっているなど、私はこの一年で考えた。

日本という国は本当に素晴らしい国で、ご飯もおいしく、設備や制度もしっかりと整っている素晴らしい国であると言える。しかし、メディアや人間性などに目を当ててみると、その素晴らしさよりも人間の汚い部分ばかりが私には見えてしまう。今回のコロナでもそう。なぜアメリカや他のヨーロッパの国々の感染者数や現状を日々放映せず、日本の感染者数だけを放

映しているのか？こんなに狭い国に一億三千万人も住んでいて、スクランブル交差点や満員電車など海外の旅行客が注目するほど多くの人が一瞬に密集をするような事象がいくつもあるのに、東京でもまだ最高で六百人しか感染者数が出ていないことは素晴らしいことでは無いのあろうか？確かにアメリカは十七万人ほど日々感染をしているが、日本はアメリカより圧倒的に人口密度が多い。アメリカの感染のスピードで日本で感染者数が増えたら、一日百万人以上感染してしまふような気がするのは私だけだろうか？もつと様々な物に目をやり、メディアもしっかりと真実を伝えるような国にはなれないのだろうか？自殺者数がコロナ前と比べ飛躍的に増え、コロナの感染者数よりもはるかに多いことは報道しなくていいのだろうか？まだまだ日本のこの文化には改善していかなければいけないことが多いような気がする。

最後に私が話したいのは、大勢で人と違うことをしている人を叩く文化がなぜ存在しているのかということである。戦時中に非国民を皆でいじめ、何かメリツトはあっただろうか？先人たちが命を賭して私たちに伝えてくれたものを本当に国語や社会の授業で学び、

大人になる事が出来ているだろうか？答えはNOだと思ふ。足並みをそろえなければいけない現在の日本の教育システムの改善が今一番必要なのではないかと思う。富国強兵には素晴らしい教育方針かもしれないが、戦争のない今兵士はいらない。しっかりと自立し、自分で考えることのできる子供たちを増やすことが必要なのではないのだろうか？コロナに感染してしまった人がいたら怯え、避難するのではなく、手を差し伸べてあげることではできないのだろうか？私はこの日本という国が好きだからこそ、より良い国になってほしいと願っている。日本文化の中で様々な問題や弊害があり、それらを学んできているのだから、そこから学びを得て、改善をしていけるような人が増えることに一縷の望みを持ち、コロナの感染が広がっているこの日本の社会に平穏と安定が来ることを期待したいと思う。誰もが自由に生きることが出来、アイデンティティを尊重してもらえようなシステムの構築を望む。

コロナ禍という大変な時期ですが、日本の文化に対して様々な感情を抱くことが出来ました。素晴らしい国であるからこそ、もっともっと成長していける国になれるなと思いました。立派な大人になれるようにこ

れからも日々精進していきたいと思えます。半年間ありがとうございました。

◎氏名：C (伊与田優花)

コロナ禍での生活と文化史的意味

1、はじめに

二〇二〇年、新型コロナウイルスが世界で蔓延し、人々の暮らしや社会は大きな影響を受けた。私の生活の中でも、コロナによって出来なかつたこと、逆に出来たことがあった。このレポートでは、まず自身がコロナ禍で経験したことについて述べる。その後、それらの経験から考えられる、コロナが生活にもたらすネガティブな影響とポジティブな影響の双方を考察していく。最後に、そのような影響をもたらしたコロナは文化史的にどのような位置づけられるのか考える。

2、コロナ禍での経験

(1) 中国での語学研修中止

昨年度の二月から三月にかけて約一か月、私は中国での語学研修に参加する予定であり準備を進めていた。

誓約書や入学手続きに関する書類を提出し、同じ研修先に行く予定であった学生たちと連絡も取り合っていた。しかし年明けごろから中国での感染が深刻となり、担当の職員の方からプログラム中止の連絡があった。私は中国語を二年間履修した上で、その研修によって中国語のアウトプットにも取り組みたいと考えていたため、貴重な機会を失ったように感じた。

(2) 東南アジア旅行

中国への渡航は不可能となったが、当時の人々はコロナの影響をまだ感じておらず、中国以外への渡航は自由だった。「長期休暇には海外に行つて見識を広げる」という思いもあり、私はベトナム、カンボジア、タイを二週間かけ一人旅した。行く先々には世界各国からの観光客がいた。タイで中国からの旅行者に出会い話してみると、近々出国できなくなるだろうということ旅行に来ていた。旅行中、コロナの影響は少し感じられた。例えば、各国に入国する際には体調や渡航歴に関するチェック表を提出しなければならなかった。旅行中、バイト先から連絡があり、海外旅行等帰国者は二週間出勤停止とされた。帰国後、急速にコロナが蔓延していった。

(3) ステイホーム

四月に入り緊急事態宣言が発令され、アルバイト先や多くの商業施設が休業した。大学も始業を延期したため、自宅にいる日々が二か月ほど続いた。メディアで買い物は三日に一回程の頻度が推奨されていたため、なるべくまとめて食材をかうようにしていた。一人暮らしということもあり、一度買い物をしてそれを一週間かけて消費するというようなリズムが生まれた。以前までは、週に三から四日アルバイトに出勤しており、賭いを食べていたため、自炊を毎食する生活は初めてだった。そのような自炊の日々により、朝昼晩でどのようなものを作り食べるのか自分の中で確立され、現在の生活にも生きている。アルバイトが出来なくなつたことにより収入が失われたが、後に政府からの十万円給付金により困窮せずに済んだ。

(4) オンライン授業

五月に入り、オンラインでの授業が始まった。オンデマンドで授業をする先生もいれば、オンタイムでする先生もいた。私は授業をため込むことを防ぐためにどちらにせよその授業が本来行われるであろう時間に勉強した。当初はディスカッションを含む授業をオン

ラインですることに戸惑っていたが、対面でない方がかえって積極的に行動できた。例えば、ブレイクアウトセッションに分かれた際、誰も話し出さなければ自分がまずビデオをつけて話し始めるよう意識した。授業の内容は対面と変わらず興味深く、課題の量は丁度よかった。学校から五万円の支援金が給付されたこともあり、オンラインでも支障なく勉学に励むことが出来た。

(5) サークル活動

私はイベントサークルに所属しており、今年度は部長を務めた。昨年度、活動が軌道に乗り五十〜九十人規模で対面のイベントを開催しており、今年度は自分たちの代でそれ以上にサークルを盛り上げていくと意気込んでいた。そのようなときに対面での活動が禁止され、イベントサークルとしては致命的だと一時は悲観的になったが、サークル史上前例のなかったオンラインイベントを開催することになった。定期ミーティングはZoomを用いて週一回継続し、一、二か月に一回行うイベントに向けて準備を進めた。新入生も入り、対面したことはないがイベントの企画から運営まで十分にできるようになった。対面でイベントを開催

していた時にはしていなかった「学修的要素」を意識して取り入れるようにし、各国の季節ごとの行事を紹介・比較する企画を行っている。以前より、どのようにすれば参加者に楽しんでもらえるか考えている。現在は、オンライン疲れとも考えられるイベント参加者の減少が課題であり、地道な広報活動を継続している。

(6) Go toトラベル

夏休みには、Go toトラベルキャンペーンを利用し、箱根旅行をした。キャンペーンを利用しなければ、学生の私は利用しないであろう価格帯の宿に泊まることが出来た。箱根には若い人々や家族連れが多くいたように感じた。私の友人たちも、このキャンペーンを利用して、北海道や福岡等遠方まで旅行に行っていた。宿泊費の30%割引は私たち学生にとっては特に、それまでの旅行とは一味違う少し贅沢なことが出来る機会となったのではないだろうか。

(7) 帰省自粛

私は高知県出身で、毎年夏休みと冬休みに地元に戻るようになっている。しかし今年にはコロナが流行していたため、帰省を控えることになった。私の地元は過疎化が深刻で高齢者の割合が高く人口が少ない分感染者

も少なく見えるが、病床数が少ないために少しでもコロナ感染者が増えれば医療がひっ迫しかねない状況である。また住民同士のつながりが強いいため、もし私の帰省が原因で感染が広がれば強く批判されるかもしれない。そのような不安があり夏の帰省は自粛したが、祖父母が元気なうちになるべく会っておきたいというのが本音である。冬には帰省出来るよう、感染対策や体調管理を徹底している。

3、コロナの影響

(1) コロナによる被害

コロナによってマイナスの影響は少なからず被ることになった。私にとって一番大きかったことは海外に行けなくなったことである。外国語学部にも所属していることもあり、留学や海外旅行で外国語のアウトプットの時間を持ちたいと考えていたため、それが不可能になったことで語学に対するモチベーションが下がってしまった。しかしそこで代替の学習方法を自ら見出せなかったことは自分自身の課題である。また国際文化交流学科で学ぶ中で出会う異文化を体感する機会が奪われてしまった。やはり私は現地での活動を通して、

その土地の文化を深くできると感じるため、それが出来なかった今年は歯がゆかった。

また、周りの人とのコミュニケーションが希薄になったとも感じる。オンライン授業となり登校しなくなったために、友人らとのコミュニケーションの機会は確実に減ってしまった。また家族と対面する機会もなくなり、月に数回のチャットや電話でのやり取りが主なコミュニケーションであった。人と対面する機会が減った分、オンライン上で積極的に連絡を取るよう心がけることはお互いの支えやストレスの緩和につながるかもしれない。実際にステイホーム中はZoom飲み会が流行しており、私も数回参加した。

(2) コロナによる恩恵

コロナによってポジティブな影響を受けたこともある。例えば、ステイホーム中に自炊を多くしたことで食への関心が高まり、アルバイトに出勤するようになった今でもこまめに自炊をしてバランスの良い食生活をしようと心がけている。

また時間を有効に使えるようになったと感じる。特に大学に登校しなくなったことで通学時間や登校のための準備の時間が不要になった。授業の直前まで自分

のやりたいことをすることができ、課題をうまく消費しながら日々の授業に取り組めたと感じる。

Go to トラベルも、普段とは違う旅行を楽しめる良い機会となった。旅行者にとっても旅行関連の仕事をしている人にとっても、そして社会にとってプラスに働くように、マスクを着用したりこまめに消毒をしたり、人込みを避けるといった感染対策はしっかりと行われるべきだと考える。

4、まとめ

コロナが蔓延する中、語学研修の中止や、ステイホーム、オンライン授業、オンラインイベントなどさまざまな経験をした。コロナは悪い影響をもたらした一方で、生活の様式の変化により以前より良くなったこともあった。オンラインでの授業やサークル活動は当初不自由を感じられたが、一年間継続すると慣れ、友達に会えないこと以外は満足のいく活動が出来ている。

文化的な観点でコロナを考えると、それは私たちの生活に選択肢を増やしたのではないだろうか。例えば、多くの企業がリモートワークを推進し仕事の形態が多様化した。授業もオンライン授業や限定的な対

面授業など、場合に合わせて行われるようになった。また、私たちの暮らしへの関心を高めるものともなつたと考える。ステイホームで料理や掃除をする機会が増えたり、家族との時間が増えたりしたことにより、家でどう過ごすか多くの人が改めて考える機会になったと考えられる。そしてマスクの着用や消毒、ソーシャルディスタンス等、新たなあたりまえを生んだ。私たちの感染症への意識はこれまでより格段に高まっていると実感する。

今後、コロナウイルスに限らず私たちは感染症と共存していかなければならないだろう。感染症がないことを当たり前のように考えていると、それが発生した際に迅速に対応ができないと感じる。一連のコロナ禍を経験し、感染症によって社会に大きな影響が及ぶことを知った。私たちはそれに順応し、新たな選択肢や生活様式を手に入れることができている。困難に直面した際、その状況をただ悲観するのではなく、その状況の中でどう行動するのかを積極的に考え、その経験が後に活かされるべきだと考えられる。

◎氏名：D（柳瀬可南子）

新型コロナウイルスの中の生活

今年、新型コロナウイルスの感染が広がり、私たちの暮らしや社会が大きく変わった中で私の過ごし方がどのように変わったか、また、新型コロナウイルスの問題を日本文化史の中でどのように位置づけるか、自分の体験を踏まえて述べていきたいと思う。

私の過ごし方は、今日の新型コロナウイルスの感染拡大により大きく変わった。まず、家にいる時間が大幅に増えた。新型コロナウイルスの感染拡大以前は、朝起きて学校へ行き、放課後はサークル活動をしたり友達と遊んだりして、家に帰るのは夜であった。長時間自分の部屋で過ごすことはほとんどなかったため、机などは物置状態であったし、それで困ることはなかった。しかし、一年生の春休み、新学期の開始は遅くなり私たちの行動も制限することが求められた。自然と家で過ごす時間は増え、四月の一月間を無駄にしないような生活を心に決めたが、結局中途半端でだらだらした生活を送ってしまった。しかし、授業もバイトもなく友達とも会わずに、あんなにだらだらした

生活ができるのはもう一生ないのではないかと思うので、あの時間を少し恋しくも思う。自粛期間中は友達と電話をしたり、Zoomを使ってコミュニケーションをとったりしていた。オンライン授業を受けるために机の上は片づけ、ほとんど使っていなかったパソコンとの戦いが始まった。TeamsやZoomのダウンロードや使い方の確認、JINDAメールもほとんど使っていなかったのいろいろな設定をしてオンライン授業に備えた。

オンライン授業が実際に始めると、対面授業と比べて良い点や悪い点が見えてきた。良い点は、授業の数分前に起きることができれば間に合うことと着替えるなどの出かける準備をしなくていいことと教室移動がないこととオンデマンド型であれば自分の予定に合わせて受ける時間を変えることができること、そしてなにより課題に費やす時間が増えたため、一年生の頃よりもクオリティーの高いレポートやプレゼンテーションを作ることができ、大幅に成績が上がったことである。また、課題が大変なため終わった後の達成感オンライン授業のほうが大きい。

その一方、悪い点は、常にパソコンと向き合ってい

るため、座りすぎて体が痛くなったり、パソコンのブルーライトのせいで寝つきが悪くなったりしたことと図書館や各種お問い合わせなどの大学の施設が使いづらいことと先生によって授業のツールや課題の提出方法が違うため、いろいろなやり方を覚えて対応しなければいけないこと、友達や先生とのコミュニケーションのしづらさと友達になかなか会えないことで、課題や授業がわからなくても、ストレス発散やリフレッシュができません、ひたすらマイナスな気持ちになってしまふことが挙げられる。授業のことだけを考えると圧倒的にオンライン授業のほうがいいと思うが、私がオンライン授業を通して、友達と会えるという環境は自分が思っていた以上にとっても大切なものであると改めて感じたので、大学は対面授業であるべきだと思う。

私は、今年成人を迎えた。来月には成人式がある。その成人式にも新型コロナウィルスの影響はある。例年は、市内で一回の式が行われるが、今年は三部制で行われるため同じ市内であっても会うことができない人がある。また、去年までの先輩のSNSの投稿や話で聞いていて、とても楽しみにしていた中学校の同窓会もない。一生に一度の自分が主役の成人の日の普通

を奪われたこの気持ちは、誰も悪くないからこそ言葉にするのが難しい。しかし、成人式の開催が延期、中止になっていく地区もあるので、あと数週間でどうなるかは分からないが、今のところ開催してくれることはとてもありがたいと思う。新型コロナウイルス感染拡大の中、私の生活はこうのように変わり、改めて気づくこともある日々だった。

この新型コロナウイルスの問題は、ネット社会を助長させるものであると思う。新型コロナウイルスの感染拡大前の日本は、世界と比べてデジタル化が遅れていると言われていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大により、インターネットを使わざるを得ない状況になった。そのため、今まで無理に進めなくても済んでいたデジタル化が一気に進んでいったと考えられる。新型コロナウイルスの感染拡大は、授業や手続きなどはオンラインでもできることや出社しなくてもできることがあることの証明ができ、日本のデジタル化のいいきっかけになったと思う。そしてそれは、働き方改革へもつながっているのではないかと思う。例えば、出張しなくてもオンライン会議で済ませられることや、在宅勤務で働く時間を選べるようになれば、

出産、子育てをする家庭の人でも働きやすい環境を作ることができるのではないかと思う。この新型コロナウイルスの問題を、後になって大変だっただけで済ませるのではなく、社会が少しでもいい方に傾きつつかけにしていかなければいけないと思う。

この新型コロナウイルスの問題は、私たちの生活を大きく変え、改めて気づかせてくれることもあった。この問題は、日本文化史においてとても重要な位置づけにあり、そしてそれは日本の歴史において、とても大きな転換点になったのではないかと思う。

◎氏名：E (原田真帆)

まず、新型コロナウイルスの感染拡大以降一番変化したのは学校に行けなくなってしまうということである。こればかりは本当にどうしようもないことだが、大学生活丸一年が台無しになってしまった。先生方ももちろん大変なのは十分承知しているつもりだし、課題などで成績を付けるしか方法がないのも分かっているが、やはり以前のように大学に通っていた時よりも遙かに課題の量が増えた、ということが一番苦痛だった。毎日のように課題に追われ、休日も、そもそ

もコロナで自粛していたので遊びに行くことは出来なかったというのがあるが、休みの日が休みではなく課題を処理するためのお休みの日と言った方が正しいくらいだった。それに加え、学校では友達と授業を受けたりお昼を一緒に食べたりとそれが当たり前だったのに、友達にも会うことができず上の空状態だった。また、教室で授業が受けられず課題は多いのに授業料はそのまま、という状況にも疑問を呈せずにはいられなかった。

また、学校が始まるまで、特に緊急事態宣言が出されていた際には当たり前だがどこにも行かず、ただ食べ物が必要なのでそのための買い出しをしにスーパーに行く、というくらいで特にすることもなく映画を見たりしてなんとかやり過ごした。私は映画を見るのが大好きなので、好きなだけ映画を見ることができてその点は良かったともいえる。そうした生活を送る中で私が一番感じたのは、人は誰かと直接会って話をしないと本当にストレスがたまるということである。ストレスがたまった状態のままだと、体だけではなく心にも害である。そのため、よく近所を散歩したりして気分転換していた。しかし、最近では外出の機会も徐々

に増えてきたのでストレスはどこにも行けなかった時期よりはあまり溜まらなくなつた。よつて、外に行くというのは案外大切な事なのだと感じた。とはいへ、最近また感染者数が増えてきているのであるべく外出はしないように心掛けている。それから、特に感染者の多い東京へは、緊急事態宣言発令以降一度も遊びに行っていない。東京には行きたい場所がたくさんあるので、コロナウイルス感染拡大が収まって、元の生活に戻り次第行きたいと考えている。

そして、他に大きく変わったことの一つとしては、外出時にはマスクを常に着用しなければならなくなつたということである。今頃の時期は防寒対策にもなるので、多少の苦しさはあつたとしてもいいのだが、夏の時期は本当に苦しかった。とはいへ、マスク着用によつてかなり感染予防になるということであり、実際にマスク着用で抵抗のない人が多い日本では他の国々よりもはるかに感染者数が少ないのでマスクが有効だということが明白である。また、今ではもはやマスクをつけるのが当たり前なので、外すのがどこか恥ずかしい気もする。

新型コロナウイルスの問題は、日本文化史の中にお

いてどのような位置付けなのかということだが、このコロナウイルスの問題により日本経済や様々な政治制度の見直しにつながつたのではないかと考える。新型コロナウイルス感染拡大に伴う経済的活動における様々な打撃は、ある種の震災ともいえるだろうが、そうした際における政府の対応があまり十分とは言えないということが今回も露呈したと言える。こうした未曾有の事態に対して、日頃から対策を講じておくべきだと考える。身近な例で言うならば、大学の授業料について挙げられる。神奈川大学は私立大であり、学校の維持費を学生からの学費で賄っているので学費を大幅に下げるわけにはいかない。そこは確かに仕方のない部分もあるだろう。しかし、後期は一部の授業は対面になつたところもあるが、大体はオンライン授業のまままで一年間一度も学校に足を踏み入れることなく終つた学生が多いと思われる。実際、私もその一人である。それなのになぜ通常通りの授業料を払う必要があつたのだろうか。このような事態に陥つた際に、国が大学の維持費などを一律に負担するようなシステムを構築すべきではないかと感じた。すべて負担するのはなく、一部でもいいのでそれを国が賄えば学費は

全ての学生を対象に減額できるだろう。

また、体験とは少しそれてしまうかもしれないが、持続化給付金や雇用調整助成金についても改正の余地がまだあるのではないかと考える。このような制度のお陰で助かった事業者もいる一方で、特に持続化給付金はすべての事業者が対象になるわけではない。また、雇用調整助成金の方も、実際手続きに二か月ほどかかったり、助成金の額も少ないために結局差額は会社が負担しなければならぬなどと、まだまだ支援を充実させる必要があるのではないだろうか。

◎氏名：F

新型コロナウイルスの感染が広がり、私たちの暮らしや社会が大きく変わった中で、私は家から外に出るとしたらアルバイトか食料品や日用品の買い物くらいで、ほとんど今年はお出かけの回数が少なかった。しかし、私は家でできる最大限のことを主に二点〔に〕し〔ぼつ〕て過ごしている。

一点目は、来年の就職活動に向けて志望業界のインターンシップを受けている。私は現在三年生で、来年から就職活動が始まる。今年の六月からインターン

シップを開催している企業の申し込みが可能だったので、まず六月よりも前に自分の志望業界や気になる業界を絞った。元々私自身、海外の企業に就職したいと考えていたため、海外で働くイメージを神奈川大学の就職課のカウンセラーの方に聞き、自分がどのような流れで海外に出て働くかという具体的なイメージを抱くことができるようにした。しかし、新型コロナウイルスの状況やそもそもビザの取得が難しいという問題があったため、結局、日本企業に就職し、海外勤務を目指すことにした。本来、神奈川大学の国際文化交流学科は航空や旅行、ホテル業界に就職している先輩が多く、実際私も旅行業界には興味があった。しかし、新型コロナウイルスの影響で、航空・旅行業界は大打撃を受け、業績が悪化しているというニュースを聞いた。そのため、旅行業界は志望業界から外した。だが、私は英語を使って世界と関わる仕事をしたかったため、商社や運輸、貿易関係の業界に絞った。六月以降は、志望業界のトップから中堅の会社も含めてプレエントリーをし、エントリーシートの提出をした。その時は、就職サイトが提示しているエントリーシートを書くときの注意点などの情報を活用して、エントリーシート

を書いた結果、何社か通ることができた。

インターンシップでは、ほとんどがオンライン開催で、インターンシップというよりは説明会という形式になってしまふ。課題解決型のインターンシップでは、グループワークだが、グループのメンバーの顔を伺ったり、メンバーと話すタイミングが被ってしまったり、相手の言いたいことを上手く汲み取れないことがあった。オンラインでは、相手の表情を読み取ることが難しく、相手の雰囲気などを読み取るのが難しいと感じる。同様に私も通常よりリアクションを大きさにしてみたり、聞いている時の表情を笑顔にしたり、相手の述べたことを繰り返して確認してみることを意識する必要がある。唯一一社だけ対面の課題解決型インターンシップに参加したが、改めて対面の良さに気づかされた。私たちが普段会話をするとき、会話の内容だけでなく、声のトーンや表情、身振り・手振りなどからも情報を読み取ることを大島先生の文化交流論（社会）の授業で学んだ。いかに私たちが普段の会話で会話の内容以外の部分からも情報を得ているのかということが明確に分かった。対面の会話でさえ、時々相手と自分の話が噛み合わないことがあるのに、オン

ラインなら尚更噛み合わないだろと危惧してしまふ。

実際に、対面インターンシップのグループワークではスムーズに進行し、意見の行き違いなどの問題は起きなかった。途中休憩では、どのような業界を志望しているのか、どんなことを今はしているのか、就職活動の進捗など情報交換と共にインターン生同士の親睦を深めた。オンラインではこのようなインターン生同士の情報交換の場は設けられない。新型ウィルスでインターンシップでもオンライン開催がほとんどであり、感染リスクは避けられているものの、以上の点から対面でのインターンシップの方がやはり良いと感じている。改めてインターンシップという観点から見ると、オンラインよりも対面の有難さを感じる場面が多々あった。

二点目は、語学の勉強をしていた。私は第二外国語として大学一年生からドイツ語を履修している。高校生の時からドイツ語を勉強していたが、難しいと感じ途中で挫折してしまつたため、大学一年生から改めて最初から勉強した。二回目となるとドイツ語は高校生時ほど難しいとは感じず、むしろ好きになっていった。昨年の秋学期はドイツに半年間派遣交換留学していた。

ドイツでは英語をメインに勉強し、ドイツ語も言語の授業で勉強した。日本に帰ってきてから、ドイツ語の授業は前期履修しなかったものの、折角ドイツ語をドイツで勉強したからには日本でもドイツ語を独学で勉強したいと考えた。闇雲に勉強するのはモチベーションが下がってしまうと感じ、ドイツ語技能検定三級獲得を目標にドイツ語の勉強を独学で始めた。ドイツ語技能検定は一年に夏と冬の二回開催されているが、夏は新型コロナウイルスの影響で中止になってしまった。そのため、十二月に行われる冬のドイツ語技能検定に向けて勉強をした。大学一年生の時に使っていたドイツ語の教科書やドイツで使っていたドイツ語の教科書自分で買ったドイツ語技能検定の過去問や単語帳を利用して勉強していた。

ドイツ語だけでなく、英語の勉強もしていた。英語に関しては、十月に実用英語技能検定準一級に向けて過去問などを活用して勉強した。また、日本だけでなく、世界共通に英語の能力計るために使用されているTOEICやTOEFLも今後受けていきたいと考えている。将来英語を使った仕事に就職したいので、英語の語学能力を高めるのは必須であると考えている。

しかし、独学による問題点は、リーディング、リスニング、ライティング、スピーキングの四技能の内、最初の三の能力は伸びるものの、スピーキング能力は伸びないと懸念した。独学という点で対面でもオンラインでもスピーキング能力をどのように上げるかという問題は起こり得る。そこで、留学先でできたドイツ人の友達とZoomで英語や時々ドイツ語で会話して、スピーキング能力を高めている。新型コロナウイルスの影響で海外へ旅行や、留学ができないなどの行動が制限されている。本来、日々課題や友達と出かける、屋外の趣味に没頭できるという時間が制限されることで時間に余裕が生まれる。時間に余裕が生まれたことで、オンラインで海外の友達と話してスピーキング能力を高められるという利点があることに気が付くことが出来た。実際に会って話すことはできなくても、オンラインで顔を合わせてお互いの文化交流をできるという本来のテクノロジーの凄みを肌で感じる事ができた。

語学の勉強に関して言えば、独学の場合はスピーキングの勉強以外、新型コロナウイルスの影響はあまり受けないと感じる。しかし、大学の語学のオンライン

授業は対面授業よりもとても授業を受けづらいと感じていた。なぜなら、グループワークやペアワークでブレイクアウトセッションに振り分けられても、相手が仲良い相手でない場合や、話しかけても反応が薄い場合など言語以前に、コミュニケーション能力の問題が発生してしまうからだ。また、学期の当初の授業では生徒はカメラをオンにしていたものの、授業後半になるにつれてカメラをオンにしなくなる。ブレイクアウトルームでもカメラをオンにしなくなり、親交が深められない、話しかけても反応が返ってこないといった問題も生じた。以上の点から語学のオンライン授業はとても受けづらいと感じる。語学の勉強という観点から見ると、対面とオンラインの凄さ両方を感じることができた。

最後に、新型コロナウイルスの問題は日本文化史の中で、テクノロジ技術の活躍と新たな問題を発見できたという面で重要な位置づけであると考える。なぜなら、オンラインやAIといった先進技術の良さと同時に課題を私たちは痛感したからだ。現在、AIなどの技術が発展し、私たちはあらゆるものをAIや機械に頼っている。新型コロナウイルス下で友人や学校の

先生、会社の人々と直接は会えないが、Zoomやビデオチャットなどを通して会うことが可能である。日本だけでなく、海外に住んでいる友人と話して語学力だけでなく、異文化理解の機会を得ることが出来るという点はテクノロジの良さであると考えられる。学校の授業では、授業に使用する教材を印刷せずに配布することが出来る、大学の建物に行く必要がなくなり、電気代・水道代の節約になるといった環境に配慮された点が挙げられる。会社では、出勤回数が新型コロナウイルスの前までは週に五回出勤しなければならなかったが、週に一〜三回に減り、毎日会社に行かなくても家で仕事はできるという新たな発見が生まれた。女性の仕事と家事・育児の両立を目標に日本政府は動いているが、実際は働いている女性の半分は出産の時に勤めていた会社を辞めている。しかし、この発見は女性が働きながら、家事や育児を両立できるという新たな可能性を広げることが出来るかもしれない。同時に男性も家事や育児に参画し、男性側も仕事と家事・育児の両立ができる。テクノロジ技術が発達していなければ、上記に挙げた新たな発見はできなかっただろう。

一方、テクノロジー技術の新たな課題や課題とされてきたものが如実に表れてきたものもある。新型コロナウイルス発生から約一年友人と直接会えずにストレスが溜まっているという問題もある。短期的に言えば、オンラインなどの技術は役に立つかもしれないものの、長期的には続かないことが分かった。先程述べたように、インターンシップでもオンラインで開催するよりは対面での開催の方が良いと感じる。学校の授業の面では、コンピューターの調子が悪いと授業を受けることが難しい。また、自宅で授業を受けているため、学校で授業を受けるよりも集中できないという問題もある。雇用の面では、失業者は増えるという問題も起こった。

この問題に関しては、テクノロジーに頼りすぎると起こりうる問題として新型コロナウイルス発生前から言及されていた。実際に、学生が大学に通わないことで、校舎をきれいにしている従業員の必要性や食堂の職員の方々の必要性が学校に通っていた時よりもなくなり、従業員の人数が減らされる。大学だけでなく、他の職場でも会社員が会社に通う頻度を減らしていることで、外に出ず、交通機関でも便を減らすという動

きが見られた。結果的に、経済が循環せず、景気が悪化し、雇用が減っていく。この一年オンラインなどの先進技術に感謝しつつも、オンラインの負の側面に悩まされているというのも事実であった。このように、新型コロナウイルスの問題は日本文化史の中で、テクノロジー技術の活躍と新たな問題を発見できたという面で重要な位置づけであると考える。

新型コロナウイルス発生により、私たちは新しい生活様式として、今までの生活様式を変える必要があった。その過程では問題も生まれたが、新たな発見も生まれた。この発見はたとえ新型コロナウイルスが治まったとしても新しい生活様式の一部として残り続けていくと予想する。新たな生活様式は日本の新たな文化・慣習となり、根付いていくだろう。

◎氏名：G

新型コロナウイルスの流行による外出自粛の措置は私に閉塞感をもたらし、大学の授業がオンライン化したことに抵抗感と孤独感を覚えた。しかし、新型コロナウイルスが発見されてからおよそ一年が経とうとする現在、そうした閉塞感や孤独感はほとんど感じなく

なり、この生活に慣れてしまっている。日本でも新型コロナウイルスが流行し緊急事態宣言が出されるようになった四月ごろ、元々遠出をそこまで好まなかったにも関わらず、宣言に反発するように自宅近辺を歩き回ったが、今では家に籠りきりであることにストレスを感じない。

オンライン授業が始まった五月ごろは不自由さと孤独感に耐えられず連日のように友人と電話していたが、後学期はほとんど電話をすることは無く、一人で学業に取り組めるようになった。新型コロナウイルス流行当初に感じていた自由を奪われたという感覚、旅行や留学が白紙になってしまったことへの怒りは消え、去年でできたことができないことに疑問を抱くことは無くなった。感覚が麻痺してきたのか、日々報じられる感染者数に心を痛めることもなくなったが、気分は決して穏やかではなく、ずっとこのように制限された状態なのではないかと、どこか暗澹たる思いで生活している。

この新型コロナウイルスの状況に慣れることができ自分の適応能力に驚いているが、私がこのコロナ禍においてかなり恵まれた環境に身を置いているからこ

そ慣れることができたのだと思っている。今現在、私の知人に新型コロナウイルスに感染した人はおらず、新型コロナウイルスの恐怖を間近に感じたことはない。

実家で暮らしているため食事や掃除といった家事は母に頼むことができ、父の収入も急激に落ち込むことは無く、衣食住も学費の心配も一切していない。加えオンライン授業に必要なパソコンやインターネットは以前から揃っており、一人で静かに授業に集中できる自室もある。環境だけみれば困っていることは無いに等しい。それにも関わらず精神的な負担は存在している。

新型コロナウイルスに伴う様々な変更で、私に最も影響があったのはやはり大学の授業のオンライン化である。オンライン授業開始当初は機材やアプリの使用もままならず、不安な状態であったが、今ではそうした不安はほとんど解決している上に、オンライン授業の利点も感じている。対面授業であれば周囲の学生が気になったり、席によっては板書が見えにくかったりという問題があったが、オンライン授業ではそれを気にする必要がない。特にオンデマンド授業の場合、自分のペースや理解度に合わせて動画を停止することが可能であり、重要なポイントを聞き逃してしまうこと

が無い。加え多くの授業で毎週課題が課せられたこともあり、昨年度と比べ授業の内容が定着しているという実感がある。

大学のオンライン授業も含め、テレワークやテレビ会議など、様々な所でインターネットサービスが導入された。これにより時と場所の制約が弱くなり、遠隔地で行われている講演会やイベントに容易に参加できるようになった。いつか新型コロナウイルスが脅威ではなくなり、以前のような生活が送れるようになったとしても、このようなオンラインの形式は残り続けるのではないだろうか。このようなサービス自体はコロナ禍以前にも存在したが、主だって使用されていた印象は無い。コロナ禍という有事がインターネットでの交流を後押しするきっかけとなっているのではないかと思う。

また、今年は様々なイベントが感染症対策のためにオンライン上で行われたが、その中で私が印象に残ったのは多摩美術大学の学園祭である。今年度、多摩美術大学は「WEB芸術祭」という名前で行われ、サイト内のページを開くと出展している学生やグループの作品を閲覧することができた。私はそのサイトへス

マートフォンでアクセスしてしまったため作品がかなり小さいサイズで表示されてしまい、作品の質感や筆致を感じることができず、オンラインとの相性の悪さを感じた。このようなことは多摩美術大学に限らず他の大学や団体の催し物でも起こったと考えられる。今後、作品はネットやスマートフォンのお小さな画面と相性が良い表現形式に変化していくのかもしれない、芸術や表現に対する新型コロナウイルスの影響を感じた。

様々なことがオンライン化したことと並行して外出自粛が要請されたことも私たちの生活に大きく影響しているように思う。しかし、私が外出自粛に関して何か不利益を得たことは無い。元々自宅と学校とアルバイト先の往復が主な移動であり、アルバイト先は自宅から徒歩数分の距離にあることに加え、新型コロナウイルスの流行により授業を自宅で受けることになったため、長距離の移動を必要としなかったためである。

外出自粛に関して一番驚いたのは「自粛警察」の誕生である。ネットやニュースで、緊急事態宣言が出ても外出している人や他県ナンバーの車に対して暴言や嫌がらせを行う人に対して、私は瞬時に第二次世界大

戦時の日本での同調圧力を連想した。お国のために頑張るなさい、自ら兵隊に志願しないなんて非国民だ、という資料やドラマなどで見た雰囲気と一緒に感じて感じた。かつての大日本帝国では自由な意見を述べることは難しかったため、あのような発言や雰囲気が生まれたとも考えられるが、現代の日本ではそうした上からの圧力は存在しない。それにも関わらずこのように自分の意見を暴力的に表現する人が全国に現れたことに衝撃を受けた。

ニュースなどで取り上げられた「自粛警察」のように、暴力的な手段にでるのは一部の人に限られるであろうが、ネット上、特にSNS上では新型コロナウイルスにまつわる様々な意見がぶつかり合い、時には誹謗中傷に近い言い回しがなされたりする。感染拡大の防止が最重要だと思う人もいれば、経済を止めないことが一番と考える人もいる。様々な考え方が存在するのは当たり前のことであるのに対し、自分と異なる意見に対し非常に攻撃的に非難する人が多い印象がある。このような現象は新型コロナウイルス流行以前からあったかもしれない。しかし、新型コロナウイルスという有事がそうした意見の異なる相手への攻撃性を

顕在化させているのかもしれないと感じている。

ネット上の意見ということに関しては、デマや煽情的な文言の影響をかなり受けた。新型コロナウイルスが流行し始めたころ、ネット上の書き込みからトレットペーパーが品薄になり、私の家もトレットペーパーが入手できず苦勞した。このようなデマや誤情報は地震や台風などの他の災害でも起こることであるが、新型コロナウイルスはそれらとは異なり長期間にわたって続いているため、デマや誤情報も新しいものが次々と生まれているように感じる。コロナ禍では、このようにインターネットリテラシーを強く問われる機会となっているのかもしれない。

また、感染症対策のための外出自粛により、飲食店や店舗の営業時間短縮が要請され、それに関連して、東京を通る鉄道の終電時間が繰り上がるようになった。これらは感染拡大を防止するための措置であるが、日本の長時間労働を抑制する働きにもなるのではなかと考えている。交通手段が無ければ会社側も無理に残業を強いることができず、帰宅時間が早くなるのではないかと。先ほども述べたテレワークなども含め、感染症対策という大義名分により日本の働き方が変化するポ

イントとなるのではないかと思われる。

新型コロナウイルスの影響で印象深いのは、やはりマスクやアルコール消毒といった感染症対策である。特にマスクの着用は公的機関からも念入りに推奨され、私も外に出るときは必ずマスクを着けている。しかし、日本では元々マスクを着ける習慣があり、特にインフルエンザの流行時期やスギ花粉症の時期には多くの人がマスクを着けていたように記憶している。私も、夏の暑い時期のマスクには息苦しさを感じたものの、それ以外の時期には全く抵抗感が無い。このことから、日本において、新型コロナウイルスにより衛生観念が進化したり、新たに加わったりすることは無いと思われる。

新型コロナウイルスは私たちに多大な影響を与えている。インターネットを利用した授業や仕事など新しい手段が生まれる一方、自分と意見が異なる者への厳しい言論やデマなど社会の分断が起こっていることも感じている。以前のように戻ったら、と希望を込めて言うことが多々あるが、本心では以前に戻ることは無いと思っている。新型コロナウイルスは私たちの生活や価値観が変化するスタート地点となると思うが、こ

のコロナ禍を経て何が残り何が淘汰されるかの見当はついていない。私の中には、私の大学生活を返せという怒りとともに、これが私の大学生活だという納得が同時に存在している。今年度計画していた留学も断念し、この一年が失われたように感じることもあるが、これは私がまだコロナ禍以前の感覚であるからだと考える。将来、このコロナ禍を経た後に二〇二〇年を振り返ったとき、この年をどのように思うのか興味深い。

◎氏名..H

新型コロナウイルスの流行に見舞われた二〇二〇年、時が過ぎるのがこれまでよりもはるかに速く感じたというのが正直な思いだ。ただ、その中でも充実はしていたと感じる。この一年間、新しいことをたくさん経験し、いろいろなことを考えた。そして、自分自身としっかり向き合い、今後の進路をある程度決めることが出来たのが何よりも収穫だったと言える。

生活面においては、大学の知人とは今年一月を最後に一度も会っていない。「今は会うべき時ではない」という意味で割り切れているため、これがストレスになるということはない。また、このこと以外にも人と

の接触はなるべく避けているため、ショッピングをする場所も徒歩圏内で済ませ、平日の空いている時間帯に行くようにしている。幸いにも徒歩圏内に大きなショッピングモールがあるので、欲しいもののほとんどはそこで揃えることが出来ている。さらに、電車には一年近く乗っていない。

どこで感染してもおかしくない中で、正しく自分の身を守ることは重要だ。そのために私は、多少なりともリスクがある行動は起こさないようにしている。外出時にはマスクをするのは当たり前で、帰宅したらまずは手洗い・うがいをすることを徹底している。今起きていることを正しく理解し、その中で自分はどうすればいいのかということを考えればこれらのことはやって当然のことになるだろう。

幸運なことに、この状況下でも私はアルバイトを流し行前と同様に出来ている。二つ掛け持ちしていて、そのどちらも学校に関わるものなので、緊急事態宣言が出された時は学校の一斉休校に伴いお休みになった。両方とも七月から再開し、今に至る。知り合いの大学生からは、「バイトをクビになった」という声がちらちら聞こえてくる。また、ニュースでも度々バイトが

出来なくなり困窮している大学生の生の声を取り上げられている。これらを見たり聞いたりする度に、今ある環境がとても恵まれていると強く感じるとともに、感謝の気持ちでいっぱいになる。

アルバイトの一つは小学校に併設されている学童保育で、もう一つは母校の中学校のバドミントン部でコーチをしている。どちらも多くの子どもたちがいるので、誰か一人がウイルスを保持していたらクラスターになり得る。これを防ぐために、私自身も日常生活の中でリスクのある行動はとらないようにしている。ただ、そうは言っても子どもたちからウイルスをもらう可能性も十分にあり、この意味では「いつ感染してもおかしくない」という覚悟は私の中で出来ている。

年が明けても、この生活はしばらく続くだろう。「今年がアルバイトをしていなかったら私はどうなっているのだろう」とたまに考えることがある。しかし、その姿を想像することは出来ない。子どもたちと関わる中でたくさんさんの元気をもらい、彼らから学ぶことも非常に多くある。今後も彼らとの交流から学んだことを、自分自身の成長の機会に繋げていきたいと思う。

世界中が「新型コロナウイルス感染症」という一つ

の大きな問題と戦ってきた二〇二〇年。もちろん日本でも同じ問題と向き合った一年間であった。日本において感染症は初めてではなく、これまでにも多くの感染症と戦ってきた。では、日本文化史の中で新型コロナウイルスの問題をどのように位置づけるのが適当か。まず初めに、この問題は歴史の中で重要な意味を持つ転換点と言えるだろう。日本では新型コロナウイルスの感染拡大によって、日常生活の中の様々な当たり前が見直された。その一つには、「出勤」が挙げられるだろう。社員が毎朝満員電車に揺られ、職場に行くことはこれまで当然のことであった。しかし今年は、感染防止のために多くの会社で「在宅勤務」が導入された。在宅でも職場と大差なく仕事ができることを知れた人は多くいただろう。このことから、今後は都内に数多くあるオフィスの需要が少なくなるだろうと推測する。社員が一同に集まって仕事をするのがこれまでの当たり前だとすると、これからは離れた場所においても仕事をする時代になると考える。その結果、オフィスを所有する必要がなくなり、それらを売却する会社が多く出てくることが予想される。

さらに、市民の価値観が「人口集中」から「分散」

に変わっていくと思う。人口が多い都道府県では自ずと人も多くなる。そうすると、感染も拡大しやすくなるというのは誰もが考えることが出来るだろう。実際に、新型コロナウイルスの感染拡大をきっかけに都市部から地方への移住を決めた人は私の知り合いにもいる。都市部よりも地方は人が少ないのは然り、自然に囲まれた生活を送ることができ、さらに家賃も安い。加えて、在宅勤務が認められた会社に勤める人であれば移住出来るだろう。そうになると、人口の極集中が至る所で起きていたこれまでとは異なり、地方への分散という点に新たな価値が出てくる。これからも、地方移住は進むと考える。

新型コロナウイルスの問題によって、多くの企業が倒産し、失業者も出た。一方で、この状況下で売り上げを伸ばしている企業も多くある。ここで一つ言えるのは、経済格差がさらに広がるということだ。彼らを救う手立てはないのが現状だ。これだけ一気に失業者が増えると、生活保護制度が機能しなくなるのではないかとも思う。また、治安も悪化するだろうということも危惧している。

政府はこの問題に対して、これといった策を打ち出

していない。それどころか、未だにとぼけたことを言っていて国民からの信頼は日に日になくなっていくばかりだ。新型コロナウイルスに関する政府の一連の対応を見て、「国家の非常事態において政府は頼りにならない」と感じた人は少なくないだろう。「それならば自分の身は自分で守る」と考える人が増えるのは想像に難くない。

このように、新型コロナウイルスの問題は新たな考え・価値観を多く生み出した。仕事においてはAIの導入が加速するだろう。これによってますます仕事の効率化が図られると考える。また、これまで当たり前とされていたことがそうではなくなった。そのなかで、本当に必要なものとそうではないものの境界線がはっきりしたと私は思う。これは、新型コロナウイルスが収束しても変わらないだろう。

◎氏名…

昨年一月より感染拡大が止まらない新型コロナウイルスの影響力は凄まじく、想像を絶するほど世界中の人々の当たり前だと捉えていた生活やそれぞれの在り方が崩され、ひとりひとりの価値観も変化を強いられ

ている。科学が著しく進歩し何事も思い通りになるだろうと考えられるこの時代に、人類が未だ敵わないものが存在することに衝撃を受けた人々も多いのではないだろうか。そのような中、一人の大学生である私がコロナ禍でどのように過ごしてきたのか、さらに日本文化史にとつてこの新型コロナウイルスの問題はどのように位置づけられるのかについて、個人的な体験をもとに述べていきたい。

私は横浜にある薬局でアルバイトをしているのだが、昨年一月下旬に初めて新型コロナウイルスの脅威を感じざるを得ない体験をした。中国の武漢が感染の中心地であったことは誰もが知っているが、その当時の日本国民はまだ新型コロナウイルスの存在を軽視していた。日本のニュースで新型コロナウイルスが取り上げられ始めていた頃、私の勤務中に日本在住の中国の方々が、いわゆる「爆買い」の一種かと思われるほど、限られた在庫しか用意していない小さな薬局にも関わらず、マスクの大量購入により在庫が一瞬で尽きる出来事があった。レジを担当していたため、どれほどマスクに惜しむことなく高い金額をつぎ込んでいたのかを知ることもできた。そうしなければならぬ事態が、隣国で起きて

いる恐怖感に襲われた。

そこから間もなく私は地元新潟に長期的に帰省することが決まっていたため、コロナウイルスによつて薬局店員がどれほど苦しんでいたのかを体験することはなかった。同期のアルバイト店員に聞いたところ、周辺住民が不安に苛まれてその小さな薬局に駆け込み、在庫不足を店員にとがめ、客同士がいがみ合い、地獄のような職場と化していたそう。たまたま帰省した自分は運が良かったなどと楽観的に考えることは許されないと感じた。

大学二年の前期は実家でオンライン授業を受けたが、パソコンやアプリケーションツールを思うように扱えないことになり焦りながらも、これがこの時代に求められている形態なのだと思ひ込み、必死に取り残されないようがき苦しんだ。以前なら毎日顔を合わせていた友人との連絡手段がSNSしか存在しない環境が自分にかかなり悪影響であることも徐々に痛感していった。家族とのみ最低限の会話をする毎日を送るにつれ、自分のコミュニケーション能力の低下もかなり重症であった。リアルの世界だけでは成り立たない生活を体験したことで、より深く人とのかかわりを積極

的に行う必要を強く感じたため、今までなじみなかったZoomやSNSをかじり始める決断をしたのは前期の終わりごろであった。自分が今まで拒んできたものを受け入れるむずがゆさはあったが、受け入れずして今後の自分のより良い人生は望めないと考えた結果だが、間違った判断ではなかったと感じている。

大学二年の後期は、前期とは異なる環境で過ごす経験をしてこの時代の変化を感じたいと思い、家族を説得して横浜での一人暮らしを再開した。この選択は自分の価値観をさらに広げてくれることに繋がった。特にアルバイトでのコロナ対策による仕事内容の変更点の多さや以前とは比較ならない忙しさに驚かされたり、繁華街での人と人との距離感や過剰ではないのかと思ってしまうほどの飲食店での客同士の閉鎖的な雰囲気戸惑いながらそれが新たな形式であると定着させていったり、人々のかかわり方を強制的に変えていかなければならない状況がこのようなかたちで浸透しているのは、地元にとどまっていたとしたら知るはずもなかっただろうと、肯定的に捉えるようにした。徐々に感染者数の減少が一時予想された時期に、人々の気が緩んでしまっていた部分も薄々感じることもできた。

このように、自分の環境を意図的に変えたことで、地域や時期によってコロナウイルスのとらえ方が非常に異なることを目の当たりにした。時代の急速な変化に後れを取りそうになりながらも、いかに自分は時代に適応していかなければならないのか、さらに現実での意思疎通の難しさから、人間にとって人と人とのつながりは生活の活力としてもどれほど大きな影響を及ぼしているかに対して、自分の在り方や他人とのかわり方を改めて見つめる機会が多く生まれ、コロナウイルスが感染拡大することがなければ得られなかった発見や考え方を得る貴重な経験ができたのではないかと考える。

最近サントリーホールディングス株式会社が、公式で興味深いCMを作成した。その中の一部を例に挙げると、この一年間で六十五万人の赤ちゃんが生まれ、三十八万組のカップルが生まれ、七割の家族の会話が増えたなど、今年あった良い部分をかき集め、歌にのせて一本の動画となっている。自由が制限されたり、思うように楽しめる機会が少なかったりした人々にとって、悪い部分に目を向けがちになるだろうが、いい部分も同じくらい多くあったことを示し、プラスの

面を見ることで視野を広げさせてくれる効果があるのではないかと考える。以上のことをふまえて、広い視野や異なる価値観に触れる機会を増やす重要性を学ぶ場面を意識的に増やしながら、私はこのコロナ禍を過ごししてきた。

このような以後歴史的にも衝撃的な期間は、日本文化史にも非常に深く反映すると考える。時代の分岐点とも考えられるコロナウイルス問題は、リアルと仮想空間の融合が特に活発に進んできたと感じる。以前は、Face to Faceが一番よいと考えられて効率が悪くても重視されてきたが、現代は完全に反対の考えが常識として捉えられてきている。例えば、高校や大学などの授業は先生と生徒がしっかりと対面して同じ空気を共有しながら学びを深めていくことが大前提であったし、ましてや実際に生で見ることではしか得られないことが大半であるという捉え方が主流だった。自分自身も同じような考え方をしていたが、それは自分が体験したことのないことに対しての偏見に過ぎなかったと個人的に考えられるようになった。経験していないことの本質を想像だけで決めつけるにはもったいない時代なのではないだろうか。同じような考えの転換に成功し

人々や企業は、この期間で多くのアイデアを生み出し、この時代ならではのより充実した生活の追求に全力を尽くしている。

集団を第一に優先していた社会が、個人に重きを置くことに特化した商品の製作も近年では最も注目されていることでも、消費の傾向から見てもかなり変化がうかがえる。世間にあまり良い印象を持たれていなかったYouTubeを取り上げても、興味深く現代の在り方に関係している。自分の興味関心のある分野を深く掘り下げていき、自分にとって好きなことは何か、自分は何に対して幸せを感じるのかを人生の軸と考えていくことが、より良い自己の形成につながると、この時代は無意識に私たちに教示しているといっても過言ではない。そのように人々の価値観や消費の傾向の変化は、日本文化史に新たな時代の到来として含まれるのではないかと考える。

◎氏名…J

今日、新型コロナウイルスの感染によって、人々の暮らしに大きな変化がもたらされた。私自身の生活も、大きな影響を受けたと感じている。このパンデミック

は百年に一度の危機とされており、「コロナ戦争」とまで言われている。私は、日本文化史の中で、このコロナのパンデミックは、変革の時代に位置づけられると考える。日本だけではなく、世界において急速な技術の進歩と経済の進歩を同時にもたらすかもしれない。最も大きな変化といえるものが、リモートスタイルの普及ではないだろうか。就職活動や大学の授業、仕事環境などの様々な場所で、パソコンや携帯などを使用した、インターネットによるテレワークのスタイルが急激に浸透し、人々の新しい仕事や勉強の環境を確立した。こうしたリモート通信環境の拡大によって、長らく変化してこなかった日本の働き方に大きな変化をもたらすきっかけになるといえるだろう。これについては、私の身近でも変化を感じた例がある。

私の父は、システムエンジニアとして仕事をしており、コロナパンデミック前までは、平日は毎日神奈川県から東京都に通勤していた。しかし、コロナの状況下において、父の会社はリモート体制で仕事をするようになった。今年の六月に緊急事態宣言が解除された後は、週に二回のみ東京まで通勤するようになった。その後現在の十二月まで同様に週二日で通勤している

が、会社側は、コロナパンデミックが終わった後も、同じ形で、社員がそれぞれ週に何度か交代で出勤する形にして、出勤する日以外はテレワークのスタイルで業務を行っていくと決定したという。それは、コロナパンデミックにおいて、テレワークが可能ということが気づくことで、そのための体制を整えることができ、また社員の通勤費などを抑えることで会社の費用を他に回せるといった利点が多いからである。このようにテレワークが普及し、そのスタイルが長く確立することで、日本経済は大きく進歩するのではないか。テレワークにより、人々は都市近郊の会社に勤めながらも、家賃が安い地方にも住むことが可能になり、それによって人口移動が起これば、地方の人口過疎化が改善されることも考えられる。コロナパンデミックは、良く考えれば、技術の進歩を加速させ、地方経済などに良い影響をもたらすきっかけになるかもしれない。

現在のコロナパンデミックの中で、犠牲になる人々は日々増え続けており、政府や人々の対応が重要であることは周知の事実である。こういった新しい危機が訪れるたびに私たちは過去から学び、乗り越えていかなければならない。コロナウイルスのような新型のウ

イルスについて、既存の情報はなく、一から考えて対策していかなければならない。その中で、歴史は大きな役割を果たすのである。

過去から学べる類似した事例として、今から約百年前に流行したスペイン風邪が挙げられる。このウイルスによって、当時の日本人口の五千五百万人のうち、一%近くが亡くなったといわれている。このようなパンデミックの時に死者を増やす原因となるのは、「密集」と「移動」である。そのため、感染の拡大を防ぐためには、人々の「移動」の制限が必要となる。私たちの移動の自由そして、大人数での会食などの密集も制限される。しかし、このパンデミックはずっと続くものではなく、必ず終わりが来るものであるだろう。新しいワクチンの開発によって治療が可能になり、それによって人々はこの制限から解放され、制限のない元の日常に戻るはずである。パンデミックのなかでの制約は永遠ではない。このような移動や行動の制限は、人間の長い人生の中で、ほんの少しの間に要求されるものだとはいえるのではないだろうか。しかし、日本政府が「自粛」を要求しながらも、十分な補助金を出さずにいるため、人々は生活のため働きにでるしかない

という状況に陥っている。そのため、「移動」や「密集」の制限はあまり意味をなさず、感染は広まるばかりであると感じている。私は、これから先の未来で自由を得るために、今こうした制限のもとで、「我慢」が必要であると考ええる。私たちは、「今」ではなく、「先」をみて行動しなければならない。

コロナの状況下は、戦争のようなものである。いつ自分が感染するか分からず、家の中でただひたすら待つしかない。移動の手段はあるものの、危険が伴い、制限もかけられる。コロナに感染した家族が、近隣の住民から嫌がらせを受けたというニュースを目にしたこともある。このように人々は、コロナによる制限のもと、攻撃的になっていく。しかし、今必要なのは、周りへの配慮と協力なのではないだろうか。他人への感染を防ぐためにマスクを着用し、医療従事者へ感謝をし、不要な外出は避ける。そういったことは、辛く忍耐を要求することである。だからこそ周りとの協力が必要であると考ええる。

◎氏名：K

二〇二〇年一月十六日厚労省が、日本初のコロナ感

染者の存在を発表したことを皮切りに、私たちの生活は大きく変化した。それは学生の私たちも例外ではなく、緊急事態宣言が発令されるほどのコロナの影響はすさまじく、対面授業を中止することを余儀なくされた。そのような影響を受けたことにより、対面授業の代わりに、オンライン授業が今年の春から多くの大学で実施されることとなり、加えて「ステイホーム」(外出自粛)の影響により、学生は学び舎が学校から自宅へと移ることとなった。

使われるアプリケーションや、詳しい授業方法などの事前の準備や学校側からの説明、また学生自身の気持ちも十分なものでない状態で始まったオンライン授業はもちろん問題点もいくつか生じた。例えば、実際に使われるアプリの操作に慣れていないなどの技術面の問題、こちらは生徒だけではなく教師側にも同様に見られたものだと思う。また、授業のチャイム等もならないため時間管理が対面(オンライン)授業に必要なとされ、教師によって使用されるアプリ等が異なるため、学生自身で把握し、それぞれ使い分ける必要もあった。実際に、私は前期間のオンライン授業では、時間の管理がうまくできておらず、授業への遅刻が多々

あった。加えて、どの教師がどのアプリを使っているのかをあまり把握できておらず、大事な知らせ自体を見過ごすことさえあった。また、オンライン授業によって室内での学習を強制されている中、私生活と学生生活の区別がいまいちとなってしまう。私生活と勉強の境目が臆気に変化してしまったため、勉強にもあまり真面目に取り組んでいたとはいえない。

このように、慣れないオンライン授業は多くの問題点や苦悩が存在した。しかし、悪いことばかりではない、例えばオンライン授業ではよりスケジュール管理能力が必要となってくる。なぜなら、チャーム等の合図がないため、学生自身で時間を把握し、授業に挑む必要がある、加えて、オンライン授業では課題の提出もインターネット上で提出する必要があるが、対面授業とは異なり、多くの課題が翌週の授業の遅くとも前日には提出することを求められた。対面授業では期末課題以外では、期限が翌週の授業日までが多いことに慣れていた私は、このオンライン授業での課題のシステムに初めはとても苦労したが、期限をしっかりと可視化することにより、この難点を乗り越えることができたように、オンライン授業では対面授業では得られな

い能力を得るきっかけと成った。

このようにコロナの影響によって、学生の生活がオンラインでの授業中心の生活に変化しただけではなく、就職活動や労働においても同様の変化がみられていると予想される。コロナの影響により、自粛を余儀なくされたのは、学生だけではなく、むしろ社会で働いている人々のほうが大きな影響を与えた。学生がオンライン授業になるということは教師側も同様にオンラインで授業を行わなければならない、慣れないことばかりなのは教師側も同じであろう。そして、教師ばかりではなく、在宅ワークを強制される会社員の方々も少なくなはないだろう。また、就活を控えた人々も被害を受けたと言えよう。例えば、人々が密とならないよう、大人数が集まる説明会などを中止し、インターネットで説明会を開催している企業も存在する。このように、現在の私たちの生活においてインターネットの存在はなくてはならないものと変化している。もちろん、コロナが流行する以前においても、インターネットは、特に若い世代を中心に必要不可欠な存在だったが、娯楽としての面が大きかったと感じていた。しかし、コロナの流行によって、現代の人々にとって、インター

ネットは娯楽以上のものへと変化していった。

インターネットを使用し、ショッピングや音楽、映画鑑賞などの娯楽はもちろん、インターネットを通して、賃金を稼ぎ、授業を受けたりなどのように、コロナの影響によって、私たちの生活はインターネット中心なものに変化していった。これは日本の歴史を大きく変える出来事だと感じる。場所を選ばない働き方、学び方で、実際にその場に訪れることのできない方のように、より多くの人々が労働や学業に参加することが可能になった。これは、従来の形や考え方を大きく変えた出来事だと言えることができる。

しかし、インターネットを通して、オンラインの状況が一般的となってきた今、外の世界と簡単に繋がることのできるインターネットであるのにも関わらず、人々の距離感はより離れていくように感じる。理由としては、人に会ってはいけない現状と、家から出なくても生活がインターネット一つで解決するこの現状だと思われる。生活がオンライン化により便利になっていくと同時に、私たちの心の距離は離れていっていると思う。これからの日本での生活においてインターネットはより重要なものとなっていくのは確実である

が、それに伴い、日本人の心の距離の問題にも目を向ける必要があると思う。

◎氏名…L (山田海渡)

・新型コロナウイルスの拡大

昨年初めから拡大を続けている新型コロナウイルスは、一年間が過ぎようとしている現在でさえ、その進行は止まることなく、未だ人々の不安の種となっている。このコロナウイルスの問題は、日本国内だけの問題ではなく、世界を巻き込んだ大きな問題であり、欧州各国のロックダウンや、アメリカ国内の死者数の増大、医療崩壊など、あらゆる面で影響を及ぼした。日本での感染者数もとどまることを知らず、師走も終わりに近い今、東京都の感染者数は、一日千人代の大台に乗ってしまおうとしている。ワクチンの開発も、世界の製薬会社が競い合うように進めているが、まだ我々国民に行き渡るまでには時間がかかりそうだ。

・新型コロナウイルスによって変化した生活スタイル

私が学ぶ神奈川大学も、今年一年間を通してオンラ

インでの授業が行われた。初めはオンラインでの授業には抵抗があったが、一年間のオンライン授業を経験してその仕組みにも慣れてきた。また、生活のスタイルもオンライン授業に合わせて変化した。まず、通常授業を行っていた頃と比べ、圧倒的に外出する時間が減り、友人と会うことも少なくなった。人間関係は少しだが希薄になってしまった気がする。対面で人とコミュニケーションをとることの大切さが今になり身に染みて分かった。授業時間に合わせパソコンの電源を入れ、画面越しに参加する。オンデマンド形式の授業では顔を合わせることも無い。同じような日々の繰り返しで、言いようのない孤独感にさいなまれた。来年度は対面授業が少しずつ再開するとの連絡を受けたがこのコロナウイルスの感染拡大を鑑みると、まだ厳しいのではないかとも思う。

・文化史のなかでのコロナウイルス

人々は歴史の中で、天然痘、スペイン風邪、ペスト、様々な感染症の広まりに直面してきた。世界中に広まる感染をパンデミックと呼ぶが、世界全体で広まったインフルエンザは今なお感染症の代名詞となっている。

インフルエンザは、一九一八年のアメリカのシカゴで発生し、アメリカ兵からヨーロッパに伝わり、感染者は六億人にまで広まり、死者は五千万人にもなったという。インフルエンザウイルスは今でも猛威を振るうが、世界での死者は一人程度にまで収まった。新たな脅威となったコロナウイルスは、果たして文化史のなかで、どう位置付けることができるのだろうか。

二十一世紀の到来で世界の国境はよりボーダーレスになり、情報だけでなく人々の交流も盛んになった。海外旅行などは数十年前と比べ、容易なものとなった。コロナウイルスの感染の進行が急速であることはその影響も大きいであろう。コロナウイルスの感染は世界の経済競争にも大きく影響を及ぼしている。今年はアメリカ合衆国の大統領選挙が行われたが、民主党と共和党の両陣営の選挙争いの中で、主な焦点はコロナウイルスへの具体的な対策をどう行っていくかだった。トランプ元大統領は、コロナウイルスへの危機感に欠けており、対策の遅れからアメリカでは多数の死者を出した。また、彼がコロナウイルスに感染してしまっただことも大きな敗因の一つであったと思われる。中国から広まっていったコロナウイルスに対し、トランプ

は陰謀論じみた言説を行い、中国を強く非難した。

今、日本を含めて、各国の代表がどのようにコロナウイルスに対し対策をとるかが注目の的であり、政治の重要な点になっている。このコロナウイルスに対してどのように「しても」国民を守れない者は、強いリーダーではないのである。人類の文化史のなかで、感染症への対策と経済の循環、その均衡をいかにして保つことが出来るか、どの国が最も柔軟に対抗したか、ということとは、後の歴史で語られるだろう。

・まとめ

コロナウイルスの感染拡大に直面しながら過ごした一年間、幸いにも私は感染することはなかった。しかし、いつ自分がかかっても、もうおかしくはない。一般人だけでなく、多くの著名人も感染し、命を落とした人もいる。また、コロナウイルスに感染してしまった人々に対し、その人の生活や対応に対し、心ないバッシングを浴びせる人がいることもまた、今大きな問題となっている。自粛による生活の変化、画面越しの顔の見えないコミュニケーションでは、相手の感情が分からない。そのために誹謗中傷を出来る環境がより

整ってしまったことは、コロナ禍での情報化社会の加速の負の側面であろう。人と人とのふれあいが少なくなった今こそ、人々は思いやりの大切さを改めて思い出す必要があるのではないだろうか。

私は来年度四年生になり、いよいよ就活も本番になる。インターンシップなどにも今参加しているが、オンライン上でのやり取りがほとんどだ。会社を選ぶ基準のなかに、コロナ禍にどう対応できているかといったことも入ってくるだろう。

コロナウイルスによる生活の変化に、いかに順応が出来るか。一人ひとりが考えなくてはならない課題は山積みであるが、人類は感染症との歴史の中で勝ち抜いてきたからこそ、今がある。今は辛抱の時期であるのだろう。

◎氏名：M（河原孝将）

私はコロナウイルス感染拡大によって、大学での講義がなくなっただけのため家の外にいる時間というのは減り家にいる時間が大幅に増えた。授業によっては直接講義を受けたものとりモートでの授業でもいいなと思うものがそれぞれあるがいままで私は通学に片道二時

間近くかかり一日で四時間は電車での移動に使っていた。今はその時間をプラスで予習や他の勉強に使うことができてるのは通学時間が長い人間からするとメリットのひとつだと感じている。ただオンライン授業だと丸々一コマ分の授業をする先生は全員ではないので授業内容そのものも出て来てしまう。ただピンポイントで大学の授業と並行して自分のしたい勉強時間が増えているのは良い過ごし方であったと思う。

いままでの文は個人の感想で、私が感じるオンラインでよい授業はほかの人は実際に受けたいと思う人もあると思う。しかし効率を求められる事務作業などの会社などではどうだろうか。いままで働き方改革といわれてきたが正直自分は学生という立場であったためあまり気にしていなかった、しかし新しい生活様式といわれる中でパソコンなどを活用したりリモートで家事をするといったことをせざる（を）得ない状況になりもちろんすべての職場でもないし、職によっては現場に行かなければならないという場合もあるがすべて会社に来なくても良いのではと気づく会社も多かったのではないだろうか。

日本がいままで踏み出すことができなかった働き方

にならざる得ないことで気づくことのできないことに気づくことのできる大きな期間なのではないかと思う。また感染防止策としての一つ手洗いがいい、消毒などがあるがそれによってまわりでインフルエンザになった人は一人もおらず風邪をひいたという人もいない。私自身も体調を崩すことが一切なかった。データとしてもインフルエンザ患者数が例年よりも激減しているデータがある。これはコロナウイルスを肯定したいわけではないがこのような状況だから普通のことをしてきた時とそうでないときの違いを知ることができていると感じる。

この状況の中で大きな影響を受けているのは飲食や旅行関係の人たちだろう。私も飲食店でバイトしているため緊急事態宣言のでいた五月などはそれをよく実感していた。コロナウイルスが発見され約一年収まるどころか、再び感染が広がりがクチンが完べきではないなかでのさらに新しいウイルスの発見。すぐには収まるとは考えにくいため今まではまた違う飲食店の過ごし方、旅行のしかたを考えなければいけない大きなタイミングであると感じた。

私も家にいる時間は増えたが、何日かに一度買い物

や遊ぶこともある。人間たまにはストレス発散などで遊びに行くのもしょうがないことだと思う。その中でも気を付けないといけないのは密になること。私もそうするときには人の混まない時間や曜日を選択していた。一時期時差出勤などとメディアでも言われていたが、飲食や旅行をしないとその業界の人たちは普通の生活すらままならない。自粛も大事な措置であることは重々承知しているが可能な限り学校や、会社など曜日をずらせる会社などはずらして人の動きが分散しているような体制にしなければ外に出してしまうと感染するリスクは下げていけない。

旅行会社の人が知り合いにいて話したときは利用者からの優しい言葉が安心感などにつながると話していた。旅行や飲食業界を廃れさせないためにも社会全体の動かし方を少しずつ変えてつきあっていくべきタイミングなのではないかと思う。一番危険なのが国境や海をこえての物、人の移動。私も短期での英語圏への留学を検討していたが中止になってしまった。しかしほかの国同士で補い合わなければいけないものなどもあるため完全に中止にすることができない。国や海を超えての動き方も大きく変わらざる「を」得ない部分

だと思った。

私はとても安直な考えだったと今では思うが、かつては航空系や貿易に関する仕事を目指そうとしていた。理由としてはグローバル化が進み国同士の交流や物、人の動きは止まらないと思っていたため、その動きにかかわる職につけば将来困らないうちかと思っていたからである。しかし今ちようど国境を超えての人の動きはストップしている。自分が思っていたことと反対の現状である。またこれは大げさかもしれないがグローバル化が進むことに賛成だったが、グローバル化があまり進んでいない過去であったらこのウイルスは世界中で問題にはなっていないのではないだろうか？これは極端すぎるかもしれないが自分が思っていることと反対のことや良いと思っていたことの負の部分が今では起きている。

自分が所属している学部では様々な面からの異文化理解を学んでいるが、今回の世界で起きていることを通して本当に自分が思っていることが良いことであるのか、その通りに物事は動くのか考えなおす様々な考えや意見を持つ必要があると思った。

コロナウイルスは決して良いウイルスではないが、

人の動きや生活が強制的に制限されるなか社会や自分のなにかしらを変えることのできる大きなタイミンングであると思う。

◎氏名：N（小泉風雅）

二〇二〇年は新型コロナウイルス感染の世界的な流行によって、「コロナに始まり、コロナに終わる」と言えるような印象的な一年だった。中国・武漢から始まったこのパンデミックは瞬く間に世界全土に波及し、我々の生活様式に大きな変化をもたらした。しかし、大きな変化を遂げたのは私たちの身の回りの環境だけでなく、我々の慣れ親しんだ文化や慣習にまでも影響を与えている。

私はこのコロナ禍に直面し、あらゆる場面で生活スタイルを変化していく事を余儀なくした。まず、コロナ禍における最も大きな生活の変化は圧倒的に外出が減った事である。大部分が家の中の生活になり、政府による緊急事態宣言の発出が起ると、より一層外出する事が困難になった。多くの店や商業施設が営業を停止し、ペットと暮らしている私はペット用のトイレ用品や餌の用意が非常に大変だった。スーパーは営

業を続けていたが、ペットの餌はホームセンターしか販売されていないものなどがあり、結果的に営業を停止する前に止むを得ず買い占めなければいけない、という結果に陥った。また非常に個人的な事ではあるが、私はライブホールでアルバイトをしているため、アルバイト先ではコロナ禍による甚大な影響が発生していた。そのために殆どのイベントは延期ないし中止となり、社員の方たちの仕事も激減したと聞いた。この影響は十二月現在でも続いており、私はこの一年間殆どアルバイトが出来なかった。

コロナ禍による生活スタイルの変化によって、私の趣味にも大きな変化があった。元々外食が好きだった私は、居酒屋やレストランで食事が楽しめなくなってしまう事にストレスを感じていた。そこで、近年普及しつつあったウーバーイーツや出前館のようなフードデリバリーサービスを頻繁に利用するようになり、外食でしか味わえなかった料理を家でも楽しむ事ができるようになった。また、オンライン授業により余暇が増えたため、家でも映画を楽しめるNetflixのような動画配信サービスを利用することも増えた。今までも利用していたが、一人で映画やドラマを鑑賞

する事が多かった。しかし、在宅の生活が主になり家族で同じ映画やドラマを見るようになり、家族間でのコミュニケーションにも繋がった。余暇の過ごし方での最も大きな変化は、読書をするようになった事だ。今までも読書は好きだったのだが、中々時間を割く事が出来ず未読の本を積んでしまう事が多かった。オンライン授業に伴い、授業時間も減ったため自習により多く時間を使う事になり、勉強に関連した専門書や面白そうな小説を読む事が増え、半年ほどで家に積んであった未読の本の大半を読み終える事が出来た。

このような自身の生活の変化を踏まえて、日本の「文化」にどのような変化が起こっているのか、今後どのような変化が起こるのかについて考察する。コロナウイルスによって様々な変化が起こった事は先に挙げた通りだが、社会や文化といった広いレベルに敷衍して考えた時、一体どのような変化が起こっているのか。このコロナ禍の最中に、企業や大学等の教育機関では急速に「オンライン化」が進んだ。本来講堂などで行われるはずの大人数の講義は、Zoomのようなカメラを用いたオンラインチャットアプリを使って行われるようになった。企業の中でも、遠距離に出張するよ

うな営業にチャットが用いられ、書類もクラウドサーバーの使用など、インターネットを介してビジネスが行われる機会が今まで以上に増えたように感じられる。また大人数での会食を自粛するムードが高まった事で「Zoom飲み」のようなカメラ同士で会話をしながら宅飲みをする、といったコミュニケーションの新しい楽しみ方も生まれた。このように、企業や学校でのタスクから日常のコミュニケーションに至るまでオンラインのツールが普及した。

コロナウイルスの阻害が私たちの生活を激変させたが、私はこれにより生じた変化が単なるオンライン化ではないように感じる。それは、オンライン化が進んだ事によって私たちの生活が今までも「効率的」になっているのではないか、という事である。これまでも様々な場面・環境でITの普及が進んでいたが、コロナ禍による急速な社会の変化によって今まで我々の生活に存在していた無駄なもの、必要のないもの目を向けるように変化しているように感じている。その代表的な例が「ハンコ文化」に関する議論であると思う。日本では公的書類や本人確認などで当たり前のように使われてきたハンコだが、数年前からセキュリ

テイ面での懸念や、国外では前時代的であるとされているにもかかわらず使い続ける必要があるのか、というハンコの使用に対する疑問の声は頻繁に目にしていった。しかし、このコロナ禍でこの議論がより大々的に行われるようになってきている。テレビのようなマスメディアでもトピックの一つとして取り上げられ、世論も賛否に分かれている。このような大々的な議論へと波及したきっかけがコロナ禍にある。在宅で仕事を行う機会が増え、感染への対策として会社員の多くは会社に出向く機会が減った。これにより多くの会社書類に捺印するためだけに会社させている、という事が問題視されるようになった。コロナ禍による在宅ワークの普及が、社会で行われている不必要なタスクを炙り出した。

新型コロナウイルスの流行は我々の生活を激変させ、憂鬱に感じてしまう事も多い。しかし、このような変化は決して悪い変化ではないように思う。現在の環境は決して良いとは言えないものであるが、そうした社会に順応しようとした結果思わぬ方向に社会・文化に変化が起こり、より良い社会に変わっていくのであれば、それはとても望ましい事だ。今だからこそできる

事、考える事ができるものに目を向けて、コロナの先の社会について行動を起こしていく事ができるようになれば良いと思う。

◎氏名：〇

新型コロナウイルスの感染が広がり、私の暮らしは以前と比べ大きく変化した。まず一つは大学の授業である。自宅からパソコンなどを通じて受けるようになった。慣れないオンラインでの授業で、課題も多く大変な日々を送っている。私はやはり対面で受けたいなど思っている。友達と直接会って会話をすること、こういったことすらも出来ないのが非常に残念だ。そして、私はチアリーディング部に所属しているのだが、昨年度の三月から一度も大学の体育館で練習することができていない。オンラインで部員全員自宅からレッスンを受けることもあれば、施設を借りて十分に対策をして短時間だけ集まって練習することもある。しかし部員の接触を避けるため、「スタンツ」というチアリーディングの醍醐味である組体操のような人を持ち上げたり、といった練習はいっさいできなくなってしまうのだ。さらに今年は箱根駅伝の応援を始め、サツ

カー部、アメフト部、野球部と応援に行く予定だった全部活動への応援がなくなってしまう、非常に残念に感じている。

応援に行けなくてもどうにか頑張っている選手にエールを送りたいと、チアリーディング部で色々と考えて、ダンスなどを撮影して動画を作りそれを送ることにした。応援メッセージ動画は各部活に無事に届き、チアリーディング部本来の目的である「応援」をこのような状況の中でもできたことはとても良かったのではないかと思う。このように普段であれば現地に駆けつけて応援できたところをできなくなってしまったが、別の方法を考え、こういう状況だからこそできた応援スタイルだったのではないかと思った。しかし、早く現地で直接応援したいなとも思った。コロナウイルスがおさまり、早く現地で選手たちにエールを届けられるように、今はできることを全力で頑張ろうと思った。

コロナウイルスの感染拡大がマイナスイメージな要素しかなかったわけではない。私の場合、以前は暇さえあれば外出して、友達と夜分遅くまで遊んでいたことも多々あった。大学の授業に部活にバイト、遊び、などとても忙しく充実した日々を送っていたため、ほとんど家

にいる時間はなかったのだ。だから、家族とコミュニケーションはあまりとれていなかった。それどころか掃除、洗濯などといった家事仕事は全て母親に任せきりで、自分は家のことなど特に何もしていなかった。しかし、コロナウイルスによって、一時期は緊急事態宣言も出され、私は全く外出をしなくなった時もあった。最初の頃は「あー友達と遊びたい。」と思っていたが、家にずっといると、普段は感じられなかった家族の暖かさや優しさ、他にもいろいろなことに気づかされ、普通の生活をしていたらこんなにも長い間家で過ごせることなどなかっただろうし、この状態をプラスにとらえなければいけないかと思うようになった。

以前は家族、特に親との会話は事務連絡的なことばかりだったが、今の大学の授業の状況や、将来のこと、くだらない近況トークなどもするようになった。いって普通のことかもしれないが、私にとって嬉しいことであった。また、母親と一緒に買い物に行く機会も増えた。あまり母親と出かける機会が少なかった私にとっては、母親とふたりで買い物に行くということが新鮮で、もしコロナでこのような状況にならなかつたら、母親と買い物だなんて行かなかつたのかなと思

うと考え深い。コロナウイルス感染拡大によってなかなか外出できなくて、ずっと家にいるということは確かに退屈ではあった。だが、それによって家族と過ごせる時間が増えたことは私にとってはプラスでしかなかった。改めて家族の大切「さ」だったり、もっと家族との時間を大事にしたいと思えた。

私はこの新型コロナウイルスの問題を日本文化史の中で、世界が一つになった出来事だと位置付ける。世界が平和になったわけではないし、良い意味で一つになったとは言えないかもしれないが、世界中がひとつの「コロナ」という問題に立ち向かうということである意味一つになれたのかなと私は感じた。中国を発端に広まったコロナウイルスだが、今は日本でも毎日千人以上陽性者が出るほどに拡大して「い」る。しかし、そんな日本よりも、アメリカやヨーロッパの方ではもっと大幅に拡大しているのだ。日本とは違って、日頃からマスクを身につける習慣がなかったり、コミュニケーションの距離感が近かったりということもあって今はヨーロッパの国々の方が感染が拡大しているらしい。

こういった状況であるために、世界中の人々が「ス

ポーツ」を通じて一つになれる世界規模のイベントであった東京オリンピックも二〇二〇年は中止（*編注：延期）になってしまった。日本でも緊急事態宣言が出ていた頃、海外でも同様に自宅で活動を自粛するよう呼びかけが行われていて、世界中でコロナウイルスの拡大を防ぐためにいろいろな対策がとられていた。それは今も変わらずに続いている。このように、決してプラスのことではないかもしれないが、一刻でも早く平和な世の中になるようにと、全世界共通で今はコロナについて考え、コロナと向き合っている。ある意味世界が一つになっているのではないかと私は思う。早くコロナウイルスがおさまって、オリンピックなども開催されるような平和な世の中になるといいなと思う。

◎氏名：P（坂倉乃華）

二〇二〇年は、コロナウイルスが世界規模で広がったため世界中の人々にとって想像もなかった一年になっただろう。本来なら東京オリンピックが開催される年でもあったため日本国民の喪失感は計り知れないものであり、経済的にも大きなダメージを受けた。

オリンピックが延期となったものの、来年開催できるかどうか目途が立っていないため、もはや国民はオリンピックの存在すら忘れているのではないかと思う。

私の誕生日が五月で、ちょうどそのときは緊急事態宣言が解除されたばかりであったため外に出歩く人は少なく、例年であれば友達と会ってお祝いをされるのだが、もちろんそんなことが出来る状況ではなかった。せつかくの二十歳の誕生日であったが誰からも直接祝われない悲しさに襲われたが、お祝いメッセージやビデオメッセージを友達を送ってくれて、つくづく良い友達に恵まれたと感じた。

新型コロナウイルス感染の拡大を避けるため大学の授業もオンラインとなり、今までの私の日常は一変した。授業が始まる前は、朝早く満員電車に乗る必要もなくゆつくり朝の時間を過ごすことができると思っていた。しかし、授業が始まるやいなや新しい授業形態に適応することがむずかしく、さらには課題も今までより多く、常に何かに追われる日々であった。普段ならわからないことなどあればすぐ友達に確認できる環境であったが、オンラインとなるとそれが容易ではなく、授業の大変さや辛さを共有できず、このままオンライン授業

をやり切れるか不安に思うこともあった。しかし、回数を重ねるうちにどのように授業を受け、課題をこなしていくのか要領をつかむことができ、徐々に新しい授業形態に順応できた。

だが、課題をやってもやっても、日が進むとやらなければならぬことが増えるため、何か落ち着かない感じが常に続いた。さらに、オンライン上で友達と会うことはできるが、やっぱり実際一緒にいるのとは異なり、今まで毎日会っていた人に会えないのはとてもさみしかった。しかし、このような状況に陥ったからこそ、いままでの生活が当たり前ではないと実感し、人と会って話をする、食事をすることの喜びや楽しさをおかしくすることが出来た。今もなお、いつ自分が感染してもおかしくない状況であるため油断はできない。以前はバイト先と自宅の往復のみの生活であったが、たまに友達と会い食事をするなどして過ごしている。また、交通機関に乗ることや大勢の人の密集を避けるため、地元で友達と会うことが多くなり、会う際もどちらかの家に集まるなどして感染予防をしながら少しずつ今までの生活に近いことができるようになり始めていると感じる。

このようなわたしたちの暮らしや社会に大きく影響を及ぼした新型コロナウイルスの問題は、日本文化史においてターニングポイントであり、この環境に適応できるかどうかの分岐点として位置づけられると考ええる。新型コロナウイルスにより環境が大幅に変化したことで、私たちの今までの文化やライフスタイルにも影響があり、これからのように過ごしていくのか考えるきっかけとなったのではないかと。暮らしの変化として、家で過ごす時間の増加が挙げられる。外食が容易にできず自炊をしなくてはいけないため、料理に目覚める人や手間と時間のかかるパン作りなどが流行った。またデリバリーサービスの需要が一気に上がり、多くの飲食店が出前やテイクアウトに力を入れるようになり外食の仕方が変化した。さらには、オンライン飲み会という新しい文化も誕生した。感染を防ぐために物理的な距離を保ちつつ、人と人とのつながりを可能とするこのツールはすでに定着しつつある。自分の家で飲んでいるといふ安心感や周囲の同調圧力を気にせず自分の好きなペースで楽しめるというかたちは、これからひとつのコミュニケーションのあり方となっていくのではないかと。

さらには、エンターテインメントにおいても新たな形が生まれた。アーティストと観客が一体となって会場を作り上げるコンサートやライブは、このようなコロナ禍では三密要素を含むため大打撃であった。しかし、オンラインライブを行うことでファンとつながることができ、また観客に人がいないからこそできる演出を可能とした。また、チケットの当落などがないため皆が平等にライブを楽しむことができ、家にいながら日本だけでなく海外のアーティストのライブにも参加できるといった良さがある。

このように新型コロナウイルスは私たちのいままでの日常を奪い去っていったものの、これまでの生活の有難さや人と会えることの楽しさや幸せに気づききっかけを人々に与えた。そして、変化した環境をどのようにして活用していくかを考えさせ、

そこから新たな食文化や生活スタイル、エンターテインメントの形を生み出すことへとつながった。これからは新型コロナウイルスの影響は続いていくと考えられ、また新たな日本の文化が誕生するのではないかと考えられる。

◎氏名：Q

私は、新型コロナウイルスが流行っているなかで次の以下のように過ごしている。緊急事態宣言が解除される前は、ただひたすら家に引きこもって生活していた。その頃はまだ授業が始まっていなかったもので、ずっと自分の時間がたくさんある感じだった。友達と電話したり、ゆっくり湯船に浸かったり、ずっと寝ていたり、お散歩したり、ギターを引いたり、ドライブに行ったり、テレビのニュースにアンテナを張ったり、祖母と料理をしたり、部屋の片付けをしたり、お家の中で筋トレやたくさん歩いたり、最終的には、何もすることがなくて暇なのがあたりまえで、暇疲れをしてしまった。

また、おそらくコロナ鬱になった。動くのがものすごくだるくて、布団から動くことができなかったり、SNSで発信される言葉やニュースに敏感になり情緒が安定せず、病んでいた。しかし、緊急事態宣言が解除され、友達と会ったり、外で運動したり、授業が始まったことによりZoomでみんなとお話したり、徐々に回復していった。

外に出る時は、マスクをするのが当たり前で、マス

クを付けていないと周りに白い目で見られる世の中になったので、必ずマスクを付けて外に出ている。お店に入れば、アルコール消毒をしたり、体温計で温度を測ったりするのが当たり前になった。緊急事態宣言が解除された後は、割と行動範囲を広げて、友達とお出かけしたりするなど、コロナに気を付けつつ楽しんでいる。お家にいる時間が増えたので、HuluやAmazonプライムを始めて、映画やドラマ、アニメを見て楽しんでいる。また、新型コロナウイルスが流行る前までは世の中のニュースに傾けたことがあまりなかったのでもしかかりニュースを見るようになった。そのおかげで世間の意見など客観的に聞くことができるので勉強になる。

また、新型コロナウイルスに対して親がとても厳しいので、地方出身で前期の授業は実家で受けていたのですが、神奈川に戻る時とても反対された。私の意見が通って今神奈川で生活していますが、神奈川に行く時も新潟に帰るとなっても、父が車で送り迎えに片道六時間もかけて来てくれる。その分新潟に帰るとなると神奈川のアパートで二週間巢ごもりをしなければならぬ。こんなにもコロナウイルスに気を使っている

と疲れてしまった。以上のように、新型コロナウイルスが流行つてからは今までの日常とがらりと変わって生活している。

この新型コロナウイルスの問題で日本文化史にどう位置づけるかについて、私は、このコロナ問題は日本だけではなく世界全体で今の現代に忘れられない苦しい思い出と歴史に刻まれると思う。誰もが想像してなかった出来事が起こったのである。誰かと会うのが当たり前ではなく、会えないのが当たり前になった。他にも新型コロナウイルスの前にはあたりまえにできていたことの日常が、今では遠い昔に感じる世の中になった。

また、新型コロナウイルスにかかれば、感染経路を調べるために細かく行動を聞かれたり、新型コロナウイルスにかかった場所を消毒されたりすることで、それを聞きつけた人が新型コロナウイルスにかかった人やその人の家族まで批判する人が出てきた。県外ナンバーだからといって石を投げつけたり、病院の息子だからといって嫌がらせの手紙をもらったり、新型コロナウイルスにかかった人や関係しているひとをいじめ人もいるそうさ。確かに、都会から地方へ旅行など

このご時世ででかけることはあまり好ましくないが、新型コロナウイルスにかかりたくてかかった訳ではなく仕方ないことだとなぜ思わないのだろうか。

また、世界的に経済にも新型コロナウイルスの流行により大打撃を受けた。新型コロナウイルスのおかげで、スーパーやコンビニなど売り上げを伸ばした会社もあるが、やはり苦しい不況になった会社もある。新型コロナウイルスにより潰れた会社もたくさんある。失業者も増えた。実際に、私もだが私の周りの友達やその家族もアルバイトを一時期することができなかったり、辞めさせられた人がいる。それにより、新型コロナウイルスが流行る前の日常の生活の金銭面に支障がでて、一気に暮らしが苦しくなった人がたくさんいる。この先がどうなるかわからない人生で、借金を大量にかかえ自殺に至った人もたくさんいる。大学に通うのも厳しくなり、辞めた人もたくさんいる。逆に、医療関係の仕事についている人は、寝る暇もなく忙しく、それにも関わらず賃金がそれに見合ってなく看護師など辞めたい人がたくさんいる。新型コロナウイルスにかかった患者を看病しているということは、その自分も新型コロナウイルスにかかるリスクを負って

て、移す可能性がある家族にも会えない状況が続いているということはかなり辛いことだろう。

新型コロナウイルスはいつかインフルエンザのようになると言われていますが、いつ収束するのか誰にもわからない。収束したとしても今生きる時代の人たちは忘れられない人生経験になるだろう。

◎氏名：R

新型コロナウイルスの影響により私の生活は今までと大きく一変した、とは私の場合言い難いかもしれない。多くの日本人々は不便さや、家にいなければいけないことへのストレス等を感じるようになったと感じているようであるが、個人の人の問題としては新型コロナウイルスによってこれといって特に苦痛であることは今のところは存在しない。

現在の社会は大きく進歩したことによってパソコンによる遠隔授業やオンラインでできる仕事、全ての情報を一気に取り入れられるスマートフォン、ネットで購入物をし、自宅まで配達してもらえるネット通販などの非常に便利なツールが存在していることによって新型コロナウイルスのような感染症が流行していても

それらを駆使し、通常時と近い生活を送っていられる人が多くいる。中には、医療関係者であったり、自宅待機により自営業で儲けが出せない人々など、実際に多くの苦労を強いられている人々も存在していることは理解しておかなければならないが、少なくとも過去に起きた似たような感染症の流行時よりかははるかに生きやすくなっているのではないかと思う。私は特にその便利さを享受している者の一人であると感ずる。これと比べて贅沢な暮らしをしているわけではないが、親の稼ぎにより生活には困らず、現代のツールを駆使してこのような状況下でも楽に生活を送れている。また、私はそのうえ外出を嫌い家の中で他人の目にも晒されずに過ごすことを好み、体を動かすこともなく部屋の中で授業を受けられるこの状況に半ば満足しているとも言える。このように感じる人が感染症の流行時に存在していることは歴史的に見ても大きな変化であるのではないかと思う。

日本の歴史の中で人々は多くの苦労や問題を乗り越えてきている。新型コロナウイルスのような病気の流行や飢饉、その他の自然災害、そして戦争などである。それらにより直接被害に遭って命を落したり両親な

どの肉親を亡くす、また、食べるものがなく飢えて辛い思いをする、子供ながらに働きに出なくてはならなかったりと様々な苦労があったと考えられる。特にこの日本文化史の授業では戦争というものをメインに扱いそれに関連する著書や、人物を取り扱ってきた。その内容は聞いているだけで私も辛くなるような原爆の被害であったり、目の前で肉親を亡くす実体験であったりと酷く苦しい内容ばかりであった。

被害の大きさに優劣というのはあまり付けるべきでは無いと思う。どのような被災でも被害をほとんど受けなかった人とその一方で辛い思いをした人の両方が存在していることは変わらないし、亡くなった人がいるのも事実であるからだ。そのために、戦争と今回の新型コロナウイルスの被害の重さを比べる、というわけでは決していないが、現在の社会や技術の進歩、それによる仕組みやツールによって新型コロナウイルスによって直接的ではなくとも生活に被害を受けている人が歴史の中でも少なく抑えられているのでは無いかと私は思う。

例えばパソコンとズーム等のアプリが存在しなかった時代にはこうして家の中で授業を受ける、仕事

をし、人とコミュニケーションを取るといふようなことは決してできないために、学校にはしばらく行くことができない子供や、仕事をできなくて収入が無くなる人がより多くなっていたことだろう。マスクという存在もウイルスの広まりを抑え、また過度な外出を抑えるためのツールにより感染への恐れと広まりもある程度は防がれている。日本だけでは無いがこのように災害や感染症などの際に対応する力が時代とともに大きく成長していると感じる。

そして、今回の新型コロナウイルスによって学んだことを研究者や専門家が分析をし、次のために対策を強化していくために今後はこのような環境下でもより生活しやすい社会へと変化していくのではないか。私自身も今回の新型コロナウイルスの環境下で家の中の過ごし方など、上手にこの環境と付き合っていく方法を学んだが、初めにも書いたように私はもともと外出するよりも家の中にいることを好むためにどちらかと言えば充実した時間をも過ごすことができた。このように大変な状況下でも前向きなことを考える人が出てくるのも社会の進歩によって生活が安定しているからだろう。私は今回の新型コロナウイルスの環境下に

おいてそれをより強く実感したと同時に、それならばより有意義に時間を使い、この環境下とも上手に付き合っていけるよう努力していきたいと思った。

今後、このような感染症の問題だけでなく、自然災害や、最悪の場合日本でも戦争が起きる可能性があるかもしれない。そのような場合に、このように多くのことが進歩し、変化した日本では、以前にそれらが起きた時の状況とどのように変わってくるのか、また、私たちの生活にはどのように影響してくるのか、それらは実際に起きてみないと分からないだろうし、なるだけ起きないことを望んでいるが、少しでも被害や悲しみを抑えられるようになっていたとしたらそれは本当に大きな進歩であり、その進歩に携わった人々には感謝の気持ちしかないであろう。